女尊男卑の世界にて新人類は何を見る

一撃男

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アムロ・レイ、カミーユ・ビダン、ジュドー・アーシタ、バナージ・リンクス、シャア・アズナブル、パプテマス・シロッコ、ハマーン・カーンなど・・・

宇宙世紀には歴史に名を刻む様々なニュータイプが存在していた。

だが歴史に名を刻まれなかったニュータイプ達も数多く存在した。

これは名も知られず、戦場で消えたとあるひとりのニュータイプの物語。

意図せず得た二度目の人生は彼に何をもたらすのか？

ぶっちゃけると久々に見たガンダムＵＣのスタークジェガンがかっこよすぎて衝動的に描いただけです。

作者にギャグセンスがないためシリアス成分多め（のつもり）です。

目次

プロローグ ―― 1
第一話 ―― 8
第二話 ―― 17
第三話 ―― 24
第四話 ―― 30
第五話 ―― 38
第六話 ―― 45
第七話 ―― 52
第八話 ―― 59
第九話 ―― 67
第十話 ―― 77
第十一話 ―― 87

プロローグ

「総員、第一戦闘配備。ＭＳ隊、出撃準備をお願いします。」
宇宙世紀００９６年。宇宙世紀１００年の節目を四年後に控えたこの年のある日。インダストリアル７周辺にて、後にラプラス戦争と呼ばれる大戦の火種が切って落とされることとなった。
「このあたりにＭＳだと・・・ 朝から不快な予感をひしひし感じてはいたが・・・ 嫌な予感ほどあたるもんだ・・・
・・・・・・ ふぅ・・・ 俺のスタークジェガンは出撃できますか？」
整備班が少し待つように伝えてくる。仕方ないことだ。なぜなら彼、カグラ・トオルの機体は今の今までメンテナンス中だったのである。
カグラがこれまで感じてきた予感はほとんどが的中してきた。しかもこと悪い予感の的中率に関しては９割を下ることはないほどだ。
ーーそれでも今度こそは外れてくれないだろうかと密かに期待もしていたものだが、今回も、その予感は当たってしまったのだろう。
よく見知った顔ぶれがパイロットスーツを着用し目の前を通り過ぎる。
共に前回の大戦、第二次ネオジオン抗戦を生き抜いた戦友たちが、出撃していく様を見ながら
今だに消えず、むしろ先刻より大きくなってきた脳内を揺らす警告音を振り払おうと勤めた。

◇

「クソ！何をやっている！敵は一機だけなのだぞ！」
「００３番機大破！」
「敵機、第二防衛ラインを突破！」
「戦艦を狙え！機体は無視でいい！やつ一機に何機墜とされたと思う！まともにやり合うなよ！」
「チィッ！敵の目的はなんだ？」
人の生命が空に還っていくのを感じる。戦友の断末魔が耳に鳴り響く。痛みはないはずなのに激しい痛みを感じる。
カグラ・トオルはいわゆるニュータイプと言われる人間だ。それゆえ、耳を塞いでも、目を閉じても感じてしまう戦場の仲間の死に、吐き気を隠せない。
涙などは出ないーーーそう。涙は既に前回の大戦で全て枯れきってしまった。人の死にゆく声などはもう慣れた。慣れなければ気が狂う。
……慣れてしまった人間は、既に気が狂っているのかもしれないが…
「カグラ・トオル、スタークジェガン！出る！」
ハッチが開くと同時に母艦を離れ戦地へと向かう。先行した味方機の出撃からおよそ１５分後。カグラ少尉を搭載したジェガンＤ型特務使用機、いわゆるスタークジェガンが遅れながら出撃をした。
カグラの率いる小隊の残りのふたりが支援のためジェガンで続いて出撃する。
カタパルトを出てすぐにオペレーターから通信が入った。
《確認されている敵機は一。ジオン残党軍の袖付きの機体のようです。先行した部隊からの情報によると新型であるとのことです。しかもこちらの動きが読まれている節があるので敵はニュータイプかもしれない……と。
……敵がニュータイプとあらばカグラ少尉に頼るしかありません。
先行したふたつの小隊からの通信は途絶えています。
どうか……敵を打ってください》

震える声でオペレーターが告げた。ふたつの小隊を”通信が途絶えた”とは言っているが、まだ完全に現実を受け入れることができていないだろう。おそらく先行した小隊は全滅したのだ。
それにしても、たった15分で三機一組の小隊をふたつも撃沈させるとは…　今回の悪い予感は最悪のものであったらしい。
戦闘区域はまだ先のはずだが、ひしひしと重苦しいプレッシャーを感じる。おそらく相手パイロットのものであろう……　相当な手練れだ。
「了解。期待に答えられるよう最善の努力をします。
……　しかしもし本官が撃墜されたならただちに戦闘区域を離脱してください。
……　もちろんもしの話ですがね。」
ーー嘘である。カグラは自分の避けられぬ死をすぐ近くに感じていた。
カグラ自身、乗り越えてきた修羅場の数はひとつやふたつではない。そのたびに
”危険が迫っている”
という予感が頭をよぎった。
死ぬかもしれないと思った戦いも結果的には乗り越えてここにいる。
だが今回ばかりは事情が違った。自分の予感が声を大にして叫んでいるのだ。
”この先に進めば死ぬ”と。
今までの予感とは次元を異にする、濃厚な死の匂いを感じた。
それでもカグラは自分の死地へと機体をはしらせる。
現在、地球連邦政府はニュータイプの存在を認めていない。
それなのにカグラが一年戦争後のアムロ・レイのごとく、暗い独房へと放り込まれずにいるのは、仲間たちがその特異な能力を見て見ぬ振りをしてくれているおかげである。
自分を受け入れてくれた同艦の皆の信頼に答えるため。少しであろうと戦果を残してやりたい。

・・・・ たとえこの命尽き果てようとも。
自分を信頼し、着いてきてくれるふたりの部下には申し訳なく思う。
誰にも聞こえることなき懺悔の言葉をポツリとつぶやく。
「・・・・・・ 許せよ。」
共に死地へと駆ける部下へ。先行して散った戦友へ。
・・・・ 生きて顔を合わせることはできないであろう艦の仲間たちへ。

◇

新型が補足されている区域まであと少し。これより自分の人生最後の戦いが始まる。
自分が死ぬという確信は新型の補足されているポイントに近づくにつれてさらに強まっていた。
・・・・ このプレッシャーを放つ敵パイロットは化け物だ。こいつはニュータイプなんて生易しい存在ではない。
殺戮マシーンのパーツだ。何度かそのような存在と戦場ですれ違ったが、必ずそいつらとの戦闘は避けてきた。
・・・・ 勝利は不可能だからだ。
「クッ・・・・ 勝つ気でいかねば拾える勝負も拾えんぞ！落ちつくんだカグラ・トオル！」
自分に自分で激励をする。死の予感を感じていようと、最後までもがいてみせる。
同じ死なら敵の機体も道連れだ。それがカグラにとっての勝利である。
甲高い警告音が鳴り響く。ＭＳのセンサーが反応を示した。
その先で視認したのは敵艦・・・・ もの凄い幸運だろう。恐らく敵

の新型は補給中だったのだ。
だがハッチが開いていく。まずい。新型が出てきた。
新型が出撃するとともに敵艦は戦域からの離脱を試みている。
とにかく敵機が態勢を整える前に、先制攻撃をしかけることができる今が攻めどきだろう。すかさず部下ふたりに指令をとばす。
「・・・・チャンスだ。この様子ならば待ち構える敵機からの奇襲や罠まずないと見ていいだろう。
今から出てくる新型は俺が抑える！お前らは戦域から離脱を計る敵艦を落とせ！
新型の攻撃には警戒しろよ！散解！」
《《了解！》》
開いたハッチから出撃したのは、少々大型の緑色のＭＳだった。
しかし、計算違いがあった。やつは１０基を越えるファンネルを引き連れていたのだ。
「あれだけの数のビットを操作することができるのか！」
敵機がまず狙ったのは部下たちだった。
ファンネルが驚くほど精密且つ繊細な動きで部下たちを追い詰めていく。
支援は間に合わない。
結果として戦艦を追っていた二機のジェガンは敵の手にかかり、光の玉となり消えた。

「ッ！・・・・・・・クソォォォォォォォォォォォォォ‼？　堕ちろ！堕ちやがれ！」
ハイパーバズーガによる牽制弾を敵の機体にしかける。あれほどのファンネルを一基、一基落としていく余裕などない。数が多すぎる。先に本体を叩くしか勝ち筋はないように思われた。
こちらが放った牽制弾は、狙い通りの成果をあげた。敵機が無理な機体の急停止で一瞬動きを止める。
すかさずもう一方の手に持つバズーカから拡散弾を放つ。敵機は、視界を遮る拡散弾の雨に晒された。

「本命だ！・堕ちろッ！」
　両肩に装備していた三連装ミサイルポッドからミサイルを全弾射出する。本来なら対艦使用を目的としたミサイルだ。当たればひとたまりもないであろう。
　しかし命中を機体して打ったミサイル六弾は結局一弾もまともに当たらなかった。
　なめらかに滑るような軌道でミサイルを回避した敵機がこちらに迫る。
　驚くことに、敵は更にファンネルを増やしてきた。その数は２０を越えただろう。
「あのミサイルすら回避するか・・・・　接近戦ならッ！」
　ミサイルを放ちきり用済みとなったポッドをはずすして、ビームサーベルを手にとる。
　スタークジェガンの強みは、追加装備の脱着・破棄で本来崩れるはずの姿勢制御などのバランスが、緻密な調整により正常に保たれることである。それにより正常な姿勢を保った最高速の反撃が可能となっている。
　背中に取り付けた追加ブースターがはちきれそうになるほどの速度をだす。全身にかかるＧに身体中が悲鳴をあげる。
「ぬぁああああああああッッッ！」
　敵が態勢を整えるスピードも並大抵の早さではなかった。先ほどまで何も持っていなかった右腕には既にビームサーベルが握られており、カグラの一撃を受け流す。
　再び態勢を立て直しビームサーベルをぶつけ合う。二機の激しい斬撃の応酬。驚くことにカグラのスタークジェガンは敵の新型と互角に渡りあっていた。つばせり合いの態勢のまま回転する二機。
　次の瞬間、スタークジェガンが突如敵機から軽く距離をとった。
　その背には太陽。敵機の動きが鈍くなる。
「もらったぁあああああああッ!!」
　カグラの決死の一撃。コックピットを寸分の狂いもなく狙った一撃は敵を完全に仕留めたかに思えた。

しかしその刃が敵の機体を貫くことはなかった。
狙いが外れたわけではなかった。しかしカグラの渾身の一撃は、敵の機体の装甲か、またはニュータイプがもつ人知を超越した能力とでもいうか……　とにかく敵に届くことはなかった。
すかさず敵はビームサーベルでスタークジェガンをコックピットごと両断する。
「袖付きめッ……」
カグラの予感は今回も結局的中したのであった。
こうして歴史にニュータイプとして名を残すことはなくカグラ・トオルという名のパイロットはその生涯を閉じた。
……　第一の生涯を閉じた。

これより先は戦乱の時代を生きた男が再開する二度目の人生である。
女尊男卑の世界にてニュータイプは何を見る。

第一話

戦艦の中。自分が帰れなかった自分の居場所が見える。
《カグラ少尉の反応・・・・ ロスト・・・》
《カグラ少尉が死んだ？嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ》
《敵艦いまだ進行中です》
《クッソがぁッ！援軍要請却下されました！》
《敵艦の目的はインダストリアル７？いったいなんのために？》
《艦長指示を！》
《・・・・・・ これより我が艦は現戦闘区域より離脱する。繰り返す。これより我が艦は現戦闘区域より離脱する》
艦長の言葉を受け戦艦は戦域の離脱を開始した。

景色は暗転。暗闇の中にカグラはひとり立っていた。
《隊長は聡明なお方です。・・・・・・ 敵との戦力差は把握していたでしょう？》
《私達の死に果たして意味はあったのですか？答えてください少尉！》
ーーやめてくれ。違う。部下たちを殺したかったわけではない。
《ヒッ・・・・・・ ！ニュータイプ・・・・ 化け物がぁあああああああ！》
《死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない》
ーー戦友たちの死の声。断末魔。聞きたくない。やめてくれ。

ーー皆の悲痛な叫びが聞こえる。俺にできることは全てした。あの新型との戦闘においてはいつもの力をはるかに上回る能力を発揮した。勝てないまでも大健闘だろう。

再び舞台は切り替わる。これは・・・・ 最後の特攻の時だ。

ビームサーベルを握りしめ、敵の新型に突撃をかける。
太陽を背にし、敵の動きを止めた。こちらに落ち度はない。むしろベストの攻撃だ。
それでも刃は通らない。通らない。通らない。通らない。
勝てない。機体の性能でも。搭乗者の性能でも。

……敵の反撃がくる。横から迫るビームサーベル。回避はできない。敵機に近づきすぎている。
身体がビームサーベルに断ち切られ……身体は……上下に……

◇

「ッ！……ハァハァ」
酷い汗だ。全身に鳥肌がたち、喉元まで酸っぱい液がのぼってきていた。
「また夢に見るなんてな……いまだあの悪夢を振り払うことはできないようだ……」
顔を洗い、気分を新たにする。
……忘れることはできない。いや、忘れてはいけない。
顔を濡らす冷水により思考がクリアになっていく。
あの日の悪夢は自分の抱えた罪だ。カグラ・トオルの罪である。安易に忘れることはゆるされない。
カグラ・トオル……いや二度目の生を受けた彼の名は織斑（おりむら）徹（とおる）。
戦乱の時代を駆け抜けた男は、今日から中学生となる。制服の袖に腕を通しながらふと思う。
「こうして学生として二度目の生を謳歌できているのもひとえに、千

冬さんと一夏君のおかげだな・・・・」
この新たな世界に身を置いて早二年。戸籍すら存在しない子供を拾って自分の弟のように接し、家族としてくれた千冬。
驚くことに彼女は徹に戸籍を用意してくれた。・・・・ 彼女の友には天才ハッカーでもいたのだろうか？知らぬうちに、戸籍を用意していた。
・・・・ 織斑　徹の名で・・・・
同じ年齢の新しい家族に戸惑いながらも、すぐに一番親しい友人といえるほどの関係となった一夏。
彼の純粋な心はズタズタ傷ついた精神に光を灯した。
《トオルは今日から私達の家族だ。共に支え合い生きていこう。》
初めて徹が織斑家に入った時に贈られたこの言葉には、不覚ながら涙がこぼれた。

◇

「ん・・・・ なんか手伝うことある？」
真新しい制服に身を包んだ一夏が声をかけてくる。
「いや、朝食はもう少しで完成するから座っててくれ一夏君」
織斑家の朝食を作るのはいつも徹だ。
・・・・ アルバイトすることを決して許可してくれない千冬に対して、せめて食事と家事は担当させて欲しいと徹が自ら提案したことである。
今は家事や食事は一夏と分担してやっている。
食事は朝と弁当は徹、夕食は一夏。家事も分担してやっている。
意外なことではあるが、徹の料理の腕は素晴らしかった。
ＭＳに乗るしか脳のない前世ではあったが、趣味と呼べるものも多少はあった。そのうちのひとつが料理作りである。
とはいえ一番の趣味はＭＳいじりだったし、それ以外のなにかにさ

ほど興味があるわけでもなかった。
料理をすることが趣味となったのは知り合いに勧められたからだ。
最初のきっかけはＭＳの格納庫の整備長に
「このＭＳ馬鹿が・・・・ 少しは他のこともしてみたらどうだ」
と諭されたことだった。
カグラには、別段やりたいことがあるわけでもなかった。だからできることならＭＳをいじりたい。
しかし整備長はやけにカグラに趣味ということを覚えさることに必死であった。なにか趣味を見つけてくるまでは休憩時間、および自由時間のＭＳの格納庫への出入り禁止を命じるといった具合である。
食事中。戦友に趣味について相談した。すると
「このいつも変わらんレトルトの昼食をなんとかしてくんない？」
とのことであった。
その日以降は料理をするということに挑戦した。
一ヶ月後くらいに整備長に料理を振る舞うと、
整備長は不満気に格納庫への出入り禁止令を解除した。
実はこの時、整備長が真に期待していたことは、３０を過ぎても恋愛の”れ”の字すら経験していないカグラにいいかげん恋でもしてもらいたいということだった。
同じ趣味をもつ女性にでも巡り合って欲しいなと考えて。
なにせＭＳ馬鹿のカグラは機体が恋人とでも言いだしそうなくらい色恋に興味がなかったのだ。
それゆえ合コンなどを提案したところで絶対参加しないことは目に見えていた。
本人から言わせてもらえれば大層、余計なお世話であろう。
しかし真意に気づくことは今でもできない徹である。なんという鈍感さ。

何かが気に触ったのだろうか？
一夏がムスッ・・・・ とした雰囲気を身に纏い、ジト目でこちらを見つめてくる。

「徹さ・・・・ いいかげん君付けやめようぜ・・・・・ 距離感じるぞ・・・」
「こればっかりは勘弁して欲しいね。人を呼ぶときに”君”や”さん”をつけるのは俺の性分のようなものでね。・・・・・ 距離をとる目的で使っているわけでは断じてないから安心して欲しいな」
肩をすくめて、返事をする。
先の言葉は半分嘘で半分本当だ。
距離をとるために君付けをしているのではない。徹は自分でも驚くほどに一夏と千冬には心を許していた。
嘘というのは自分の性分というところだ。
徹は前世では３０歳を越えていた身だ。いくら今は学生の身に過ぎないとはいえども、精神的におっさんの徹はどこか気恥ずかしくてついつい君付けになってしまうのだ。
「その理屈なら姉さんは問題ないことになるなぁ～徹ッ！今すぐそう呼べ」
朝ごはんの匂いに釣られたのか千冬も起床してきた。
「ウグッ・・・・・・・・・ まだ寝ててくれて良かったよ・・・・・ それと一夏君と千冬さんという呼び名を変えるつもりはないよ。諦めなさい」
年こそ、偽っているもののふたりには、本音で接している。
・・・・ 前世の記憶があることはやんわりと千冬にのみ打ち明けた。
千冬は真剣に聞いてくれた。聞いた上で
「話してくれてありがとう」
と言ってくれた。それ以上の言葉はなかったが充分だった。
嘘と思われているかは分からない。けれど、誰かに聞いてもらえた。
そのことは徹の心を軽くさせた。
「「チッ・・・・・」」
君付けやめろと姉さんと呼べは一年以上前からずっと言われ続けている。
いくら恩のある相手にといえども、俺とて譲れないものはあるんです。
諦めてください。ふたりして舌打ちしないでください。無理なも

のは無理なんだ・・・・　と思いながら徹は気まずい朝食を終えた。

◇

登校中に一夏がふと思いついたように聞いてくる。
「なあ徹？お前って夢はあるのか？」
・・・・・・　夢・・・　か？
カグラとしての夢は今叶っている。
戦うことのない平和な世界。それを築くことは徹の前世・・・・　つまりカグラの夢であった。
カグラが望み続けてきた夢はここにある。ならば・・・　カグラとしてはそれを守りたい。
戦いの世など前世だけで充分。今あるこの世界が戦争を行うことがないようにする。
それがカグラの夢だ。
しかし、一夏が質問を投げかけているのは織斑　徹の夢の有無だろう。
「ふむ・・・・　考えたこともない・・・　な」
一夏ががっかりした目でこちらを見る。
ム・・・・　何か期待していたのだろうか？と徹は思う。
「・・・・・　お前はてっきりＩＳ関連の職業に就きたいんだと思ってたよ。だってお前の部屋はＩＳ関連の資料ばかりじゃな・・・・・　あッ！」
「おい一夏君、なぜそれを！
いや・・・・・・　本題はそこではないか。結論から言うと、それはないよ。俺はＩＳがあまり好きではないのだから」
なぜ見つからないように自室に隠していたＩＳの資料の存在を一夏が知っているのか？それはたいへん重大な問題ではあったからあとから追及すべきではある。
そうだ。ＩＳなど嫌いだ。敵だ・・・・・・　資料を集めているのは単なる敵情視察だ。

この世界には、前世にはない兵器があった。だが徹はその兵器が好きではなかった。

《インフィニット・ストラトス》

通称 ”ＩＳ”。

何故、前世の宇宙世紀より遥かに技術的に劣るこの世界でここまで高度な兵器が開発されているのだろうか？

徹は、前世ではＭＳいじりが趣味とはいえども、兵器に総合的な評価を与えるには、まだ知識が足りていない。

だがそれでも、武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域、自己進化を設定され、戦闘経験を含む全ての経験を蓄積することで、ＩＳ自らが自身の形状や性能を大きく変化させることが可能・・・・搭乗者の命を守る絶対防御・・・・。

これらの技術が前世では誰も実現できていないことは分かる。

この夢の技術は魅力的に感じる。

しかしこの兵器には女性しか乗ることができないという欠点がある。

・・・・ この酷い欠陥が世にもたらしたのは、女尊男卑の世界観である。

前世でも似たような価値観、男尊女卑の考え方は存在していた。

そんなものは古い考えだと徹自身は思っていた。女性であろうが男性であろうが、能力のある人物は評価されるべきだ。

大切なことは能力であり、性別などはその人間の優劣の判断基準となることなど決してないのだ。

男女の能力差はある。だからこそオペレーターは女性が多いのだ。女性は並列処理能力が高いからだ。

それによりオペレーターが女性である確率が高いことには文句を抱くはずもない。

それは性別による差別ではなく能力による適当な評価の上での判断だからだ。

ーーそれゆえ能力の有無ではなく、性別のみで人の優劣をひとつ決めてしまう ”ＩＳ” という兵器に良い感情はもてない。女尊男

卑などという歪んだ価値観を世にもたらした兵器など己の敵と見て当然なのだ。

ーーだがこの考えは、自分を納得させるための言い訳にすぎない。
徹は断じてそんなことはないと言い張るであろうが、彼の深層心理に潜む感情は
（自分が乗ることができないなんて‥‥　つまらない）
といういたってシンプルな子供の我儘のような感情だった。
初めて〝ＩＳ〟をＴＶで見たときに、乗ってみたいと思ってしまったのだ。
アレは争いの火種となり得る。人を殺すのは容易であるし、この平和を崩すこともあり得る。
アラスカ条約など一度誰かどこかの国が破ってしまえばもろく崩れさるだろう。
そうすれば、戦争が起こる。ＩＳを使用した戦争など宇宙世紀の時代。何十年も続いたあの地獄の再現になる。
‥‥　いや再現どころではすまないかもしれない。
この世界の人類は宇宙に進出していないため主な戦場は地球だろう。
主な戦場が宇宙であった前世の戦い以上に悲惨な戦いになり得る。
ーーそれでも、それでもＭＳ乗りとして、あのＭＳとは似て非なる兵器に
どうしようもなく心が惹かれる。

その心を隠すように一夏に嘘をつく。

「そっか‥‥‥　でもＩＳの整備士なんかいいと思うけど？だってＩＳ関連の仕事って相当な高収入だって話だぜ？」
「ＩＳの整備士か‥‥　高収入なのは間違いなさそうだな。‥‥‥‥‥‥　うん。悪くない気がしてきた。
‥‥　あくまで高い収入源として目指すのもありかもしれないな」

顔を喜び一色に染める同い年の家族をみて、一夏は
（やっぱりＩＳが好きなんだろうよ・・・　隠さなくてもいいのに）
と暖かい視線を送る。
一夏も千冬も徹のＩＳ好きには気づいていた。
というか気づかないわけがなかった。ＴＶなんかでＩＳの特集がやっていれば必ず録画し学校にいる間もその日はそわそわとしている。
休日フラッと外に出ては何かをベッドの下に隠す。
「任務完了・・・・」と小さな声でつぶやく徹も何度か目撃されている。
ＩＳ特集の録画予約を消してみると、その日の徹は明らかに落ち込んでいた。
ベットの下の資料は日に日に増えてきている。
それでも徹はばれるまいと好きである感情を表に出していない・・・・　つもりでいる。
一夏と千冬には、何故徹がＩＳ好きを隠しているかは分からない。その理由を知ってみたいとは思う。
しかし一夏と千冬に、必死に隠そうと、ばれまいと、する徹はとても面白かった。それを見たいがためにそのことに関しての追及はしないことにした。
そう、徹は驚くほどに自分の感情を隠すのが下手なのだ。
しかも相手の感情を察する能力も致命的なほどに低い。
それゆえ一番近くにいるふたりの家族に自分の真意を隠しきることなど不可能である。
自分の情報の隠匿技術のお粗末さに気づいていないのは徹だけであった。

第二話

一夏ｓｉｄｅ

「なぁー？頼むよー放課後にやってる戦闘訓練？とやら？

俺も混ぜてくれよぉ」

中学に入って新しく友達になった五反田　弾がそう要求してくる。

・・・・・　さては鈴がばらしたのだろうか？

戦闘訓練とは第二回モンド・グロッソの後、徹が最低限の自衛の手段を条件に、つけてくれている訓練である。

小学生のころは毎日、朝と放課後にやっていた訓練である。

中学に上がってからも、基本バイトの毎日の中、週に二度ほど日にち、時間を決めずに不定期に行っている。

・・・・・　どこで学んだのか徹の戦闘技術は凄まじいレベルの高さで、今だに徹にまともな一撃を入れることはできていない。

「断る。おとなしく帰ってくれ」

あの訓練に、一夏を尾行した鈴が付いてきた時。

めったに怒らない徹は、鬼のように怒った。曰くコレは門外不出の技であるから他人に軽々しく見せることはできない・・・・・　とのことだ。

あの日の訓練は地獄だった。横で内容によっては参加したいと意気込んでいた鈴の顔は、もの凄い勢いで青ざめて、

「参加したいというのは一時の気の迷いであります。軟弱なわたくしめではこの訓練に耐え抜く自信はありませぬ。訓練の邪魔をば失礼いたしました」

と深々と頭を下げたあと、脱兎のごとく退散してしまった。

そんな厳しい訓練を一夏は自分から望んで受けていた。

軍隊仕込みの徹の厳しい訓練も、二年以上耐えて着実に成長している。

（・・・・・　モンド・グロッソの時のように千冬姉や徹に守られるだけなんてもうたくさんだ！

今度は俺がふたりを守ってみせる！）

思い出すのは今から二年ほど前。まだ徹との仲もギクシャクしていた時に親睦を深める目的で見にいった第二回モンド・グロッソ・・・・・

～過去・回想・モンド・グロッソ～

「今日は千冬姉の大会だってさ？・・・・・・・ いや～昨日は楽しみで眠れなかったなぁ―！」

「・・・・・・・・・ うん」ボソッ

一夏はこの無愛想な新しい家族の扱いに困っていた。

千冬が一週間前に

「新しい私たちの家族の徹だ。一夏、仲良くするんだぞ」

と言って少年を連れてきた。

それ以降、徹は織斑家に住んでいる。

同い年ということで仲良くなれるだろうと期待してはいた。

・・・・・ けど徹ははっきり言うとあの一夏から見ても面白くないやつだった。

常に下を向いているし

返事はボソボソと小さな声で聞こえにくい。

おまけに返事も「・・・・・・ はい」か「・・・・・・ いえ」しか喋らない。

千冬じきじきの頼みとはいえども一夏もお手上げだった。

・・・・・ 初日に千冬に聞いたはずの少年の名前も思い出せない。

一夏は三日ほどで音を上げた。

「千冬姉・・・・ 俺、あいつと仲良くできる自信がない・・・・」

千冬は、考えたすえに自分が参加するＩＳの世界大会にふたりを連れて行くことにした。

仲良くして欲しい・・・・ と。

「写真と一致しています。

対象、織斑一夏で間違いありません」

「おとなしく拘束されてくれると嬉しいんだよね？織斑一夏君？」
ーーしかし千冬のその考えは最悪の展開を連れてきた。目の前にはいかにも怪しい風貌の黒スーツが五人。一夏を捕まえようとこちらに迫ってくる。
一夏がトイレに向かったその一時。黒服の男たちは一夏を取り囲んだ。
足が動かない。逃げることもできない。声すらでない。
……あぁこれは駄目だ。逃げられない。と思ったその時。
「貴様……何者だッ！……グハッ」
見張りをしていた男が倒れた。
……誰かが助けにきた？
目の前の男たちが意識を向ける対象が一人の別の少年に切り替わる。
信じられない。そこに立っていたのは先ほどまで、一緒にいたあの無愛想な少年だったからだ。
「何をやってるんだッ！餓鬼相手にこんな始末……フン、発砲許可を出す！撃て！殺しても構わん！撃つんだ！」
銃弾の音が鳴り響く。
信じられない。銃弾を避けている。
拳、蹴り、銃弾の嵐をかいくぐり拳を男たちにぶつける。
「動きは見えているッ！
……俺は今度こそッ！皆を守らねばならないんだッ！」
少年が大きな声で叫ぶ。……あんなに感情を表に出した少年を見るのは初めてだった。
「クソ餓鬼めッ！死ねッ！」
少年に初めて攻撃が当たった。少年は全ての攻撃を避けていたが、少年の反撃は大人たちに大きなダメージを与えるには至っていない。
体格差がありすぎる。少年の渾身の一撃も、黒服の男たちにとっては大きなダメージにはなっていないようだ。
「グハッ……」
一撃目が当たってからはチラホラ攻撃が当たるようになってきた。

銃弾だけは全て回避しているがそれも時間の問題だろう。
だが黒服の男たちも容赦のなく急所を的確に狙う徹の攻撃をくらうことで、全員苦しげな表情を浮かべている。
少年は叫んだ。
「走れ・・・・ 人がいるところまで逃げろッ！大丈夫！君ひとりくらいなんとか守ってみせよう！・・・・・・ さぁ走るんだ」
一夏は必死に叫ぶ少年から目を逸らしその場から逃げ出した。
追っ手はなかった。
助けを呼ばねば、助けを呼ばねば、助けを呼ばねば。
背中から聞こえる銃声。
鮮血が噴き出す音がする。耳を塞いで駆け抜ける。何も聞こえなかったフリをした。

人のいる開けた場所で、一夏は千冬に連絡用に預けられた携帯をとりだした。世の中で最も信頼する自分の姉に頼るしか思いつく手段はなかった。
携帯で連絡をすると千冬はそれこそ風の速さで駆けつけた。ＩＳを展開していた。
鬼気迫る表情で、一夏に少年がいる場所を聞き
「お前はそこを動くな・・・・ 人が多い場所から離れるなよ！」
そう言ってまた風となり消えた。
会場は、イタリアのテンペストの優勝を讃えていた。

「千冬姉・・・・」
一夏が次に千冬を見たのは、脇に血だらけの少年を抱え泣きそうな顔をしている姿だった。
のちに連絡があり、一夏は千冬に医務室へと呼び出された。
少年は、身体から三発の銃弾が摘出されたがどれも奇跡的に、急所からわずかにずれていた。
（これは徹が狙ってやったことだがそれに気づく人物はさすがにいな

かった）
とにかく命に別状はないと聞いたときは思いがけず一夏の目から涙があふれた。
千冬はもっと泣いていた。

数日後、意識を取り戻した少年に千冬と一夏は抱きついた。もう二度と離さない。大切な家族だ。
この時に少年は、真の意味で
カグラ・トオルから織斑　徹になった。
「……　そうだ。君の名前もう一度教えて欲しいな？」
「……　徹だよ。俺の名前は徹。よろしくね」
徹はこの日を境にみるみる元気を取り戻していく。
徹にとって一夏はかけがえのない家族であり、一番の親友となった。
一夏はこの日を境に、再び自分から徹に歩み寄るようになる。反応が鈍くても何度でも。
一夏にとって徹という少年は憧れの存在であり、守りたい大切な家族となった。
～回想終了～

「頼むよ、な？」
「絶対嫌だ。断固拒否する」
弾は予想以上にしつこかった。今日の朝から放課後までずっと訓練への参加を要求してくる。
マズイ。このままでは隣のクラスから徹が来てしまう。
弾があの訓練について知っていることを知られたら殺される。
教室の扉の開く音がした。
ーーー終わった。死んだ。さよなら千冬姉。若くして先立つわたくしめをどうかお許しください。

「あ、あなたは確か一夏に訓練をしている張本人の徹さん！実は折り入って頼みがありモガッ」
「違うんだ徹！こいつ訓練に参加したいとかわけわかんないこと言ってるけど悪いのは全部鈴だから！喋ったのも全部鈴！」
五反田の口を慌てて塞ぐ。一夏は自分が生きるために鈴には犠牲になってもらうことにした。
だが帰ってきた返事は意外なものだった。
「ん？訓練参加希望者？おー全然いいよ」
あれ？おかしい。こんなはずじゃあないんだけど
「え？徹、お前昔、門外不出が、なんたらって、え？、はえ？」
「ん？……あーアレか。嘘だよ。俺に女性に暴行をふるう趣味はないもんでね。一夏君を過剰に攻撃してお帰りいただいたんだよね。
……門外不出って言えば一夏君も納得してくれるだろってさ。
流石に何十人も指導したりはしないけど参加希望者が男ならひとりくらい問題ないよ」
意外なところから明かされた衝撃の過去。
それなら朝からずっと断り続けた俺の無駄な努力を返して欲しい。
なにはともあれ
「やったぜ！やはり男たるもの強くあらねば♪」
とのんきに騒ぐ弾と
「怒られないで済んで良かった…」
安堵する一夏は
揃って放課後、悲鳴をあげた。
その三日後。五反田　弾は訓練への参加をやめた。
その理由は本人の名誉のためにも明言は控えさせていただく。

◇

弾ｓｉｄｅ

弾は鈴に訓練中の徹の写真を渡しに教室にきていた。・・・・ そういう契約になっているからだ。訓練の情報をくれた代わりに訓練をする徹の写真をカメラに収め、鈴に渡す。
結局あんなに厳しい訓練に参加して得たものが野郎の写真だけなのだから弾は酷く落ち込んでいた。
「え？徹はあたしみたいな可憐な女の子を攻撃することはできないって？」カァー
「いや違うくて徹は女性を殴る趣味がないｔ
「あわわわわわ／／／どうしようまさかそんな風に思われてるなんて・・・・ ウウウ・・・・・」
ダメだこいつ話聞いてねぇ・・・・ 訓練の情報と引き換えに、さらに追加で徹の話を要求してきた中国娘はジタバタ悶えている。
「カワイイスズヲコウゲキスルコトナドオレニハデキナイ・・・」
「そんな、可愛いだなんて／／／」テレテレ
妄想の世界にトリップし始めたツインテールを教室に放置して弾は帰宅する。
後にモテ鈍感男ふたりの共通の友となる五反田　弾はこの作品でも一、二を争う苦労人だろう。
「イケメンは死すべし!!!」
大声で叫んでしまった彼を許してやって欲しい。

第三話

「鈴さんが明日、日本を離れるだって？」
中学二年のこと。
仲良くしていた鈴が日本を離れることになった。
一夏の口からそれを聞かされた徹は少しばかり動揺した。
つい先日までまったくそのような話はなかったからだ。
「あいつ……　お前に泣いてる、情けない顔を見せたくないとか……
わけわかんないこと言ってた！お前には別れの言葉を直接言わずに
日本を離れるってさ……
でも……　でも、そんなことあって良いわけないだろ！今、弾が教
室に鈴を引き留めてるからすぐに向かおう！一緒に行くぞ！」
一夏が叫ぶ。
「一夏君ありがとう！俺だって別れの言葉は告げたいからな……」
何故徹には泣いた顔など見せたくないと語ったか？その本当の理
由には、鈍感なふたりはもちろん気づいてはいない。
けれども一夏は長い別れになるのだから直接話さなければ後悔す
るはずだと思っていた。
徹も生きて顔を合わせて別れを告げることの希少さ、大切さを充分
すぎるほど知っていた。自分がまだカグラ・トオルだった時。自分の
死する時に直接別れを告げたかった人物は数え切れない。
ゆえに同じ後悔を鈴に抱えさせたいとは思わなかった。
思惑は違えど行動は同じだ。
教室にたどり着く。夕暮れ時の教室内には、帰宅しようとする鈴を
必死に引き留める弾の姿があった。
「鈴さん、最後に別れを告げることくらいさせてくれ」
教室に一夏と徹が駆けつけた。弾は安堵のため息を吐き出す。
「ちょっち遅いぞお前ら……　さぁ一夏？あとは帰ろう」
役目は終えたとばかりに弾は、一夏を引きずり教室を出ていく。
まぁ一夏は
「え？なんで？ふたりの別れの言葉とか俺も気になるんだけど？」

と場違いな抗議していたのだが、弾は聞く耳を持たなかった。
ふたりが教室を出ていった。
鈴は顔を赤くしながら怒っている。もっとも顔を赤く染めた原因は怒りの感情だけではなかったようだが……
「な……⁉？一夏と弾めぇ……　あれほど話したら駄目って口止めしたのにあいつらってやつは……　あたし……　あたしは……　ハァ……　でも……　そうだね。その余計なお世話が……　ちょっと嬉しいかも……」カァー
顔がさらに赤くなっていく。
「すまなかったな鈴さん。でも鈴さんには悪いけど俺はふたりに感謝してるよ。こうして別れの言葉を直接告げられるのは俺としては嬉しいからね」
徹は嬉しそうに笑う。
鈴はその笑顔を見て思い出す。
そうだ。この笑顔に一目惚れしたんだ。中国から転校してきた不安を吹き飛ばしてくれ笑顔。
その柔らかで優しい表情に私は心を奪われていた。
……　せっかく最高の親友たちがセッティングしてくれた舞台だ。
今日は妄想を現実にしてみせる。
「ねぇ？徹？ひとつ聞いていい？
「もし再会したらーーーー
こうして長いようで短かった中学生活は幕を閉じていく。
甘酸っぱい思い出を皆の胸に刻みながら。

◇

原作が開始する半年前。
世界初の男性ＩＳ操縦者が”２”名発見された。
それもほぼ同時に、日本ＩＳ専高・ＩＳ整備科の体験入学の最中に。
日本ＩＳ専高とは、操縦者以外のＩＳ関係者の育成を目的にした専門高等学校である。
その全貌は世界規模且つ操縦者を志す学生しか所属していないＩＳ学園とは大きく異なったものだ。
先に挙げたとおり、教育目的はＩＳ操縦者の育成を目的としてはおらず、一流ＩＳ企業への就職、ＩＳ技術者やＩＳ開発者を目指す者たちが集まり学ぶことが目的だ。
さらに、入学者は日本本土からの希望者がほとんどを占めている。各国に類似した教育機関が存在するため、わざわざ外国人が日本のＩＳ専高を目指す意味はないということが主な理由だ。
・・・・そしてなにより、この高校は男女問わず入学することが可能なのだ。
女尊男卑の世界を作り出した原因であるＩＳを嫌う男子も少なくはないが、ＩＳを好む男子ももちろん多数いる。
そんな男子達が一番手っ取り早いＩＳと関わるチャンスとして目指すのがＩＳ専高への入学だ。
全国のＩＳ好き男子の夢の場所である日本ＩＳ専高は、ＩＳ学園ほどではないが倍率が物凄く高い日本を代表する高校の筆頭だ。
そしてＩＳ専高はユニークな体験入学をさせてくれることでも知られている。
現役ＩＳパイロットの講習会や、ＩＳのコアを使用可能な機体にするまでの行程を機密に触れない範囲で最新の体感型ＣＧ、リアルバーチャルシステムで閲覧することができるなど、有名人、何歩も未来の技術てんこ盛りの体験入学だ。
徹たちが見学した整備科では、体験入学をしにきた中学生全員に、

実際のＩＳに触れることができる体験を実施している。
普段ＩＳに触れる機会のない学生たちにＩＳに触れる感動を感じて欲しいという、学校側の粋な計らいであった。
その意図はこれから厳しい倍率を勝ち抜こうという未来の生徒達を激励したいというものであったが・・・・
この体験が本来意図していない思わぬ結果を出すこととなった。
世界初のＩＳ男性操縦者として発見された織斑一夏、織斑徹の両名は体験入学の最後に用意されていた「ＩＳに触れてみよう」の企画でＩＳを起動したのだ。
このニュースは瞬く間に全世界に駆け巡った。両名の進学する高校はＩＳ学園に確定し、それに伴った半年間の徹底的なＩＳの教育、操縦訓練が計画された。

◇

原作より半年程の猶予を得てＩＳ学園に入学することとなった一夏は、一夏専用のＩＳ講師からＩＳの知識を丁寧にマンツーマンで指導されたおかげで、ＩＳについての知識もある程度詰め込んである。
それに、半年間操縦訓練を重ねたことにより、千冬と同じ遺伝子が遺憾無く発揮され、ＩＳの操縦技術も飛躍的な上昇を見せていた。
その腕は代表候補生にも匹敵すると言われるほどになっている。
さらにＩＳへの愛着も増していた。
続く半年のＩＳの訓練で、なんとなーく徹の影響でＩＳが嫌いじゃなかったから付き添いでＩＳ専高の体験入学に参加していた程度が、今では寝ても冷めてもＩＳのことを考えていた。
だから入学してすぐあたりに支給される自分の専用機が楽しみでしかたがなかった。
「半年ぶりに徹にも会えるしな～。女子だらけってことだから、居心地は悪そうだけど楽しみだ！」

一夏は、『ある事情』により半年間会えていない自分の家族でもある親友との再開にも大きく期待して、ＩＳ学園の土を踏む。

一方、反対に徹の半年間は最悪だった。
ＩＳに乗るのが嫌だったわけではない。いや、いまでも懲りずにＩＳ嫌いを主張してはいるが、そう言いながら口元を緩ませている徹なのだから説得力など皆無だ。
しかし、問題は半年間ＩＳに触れ合う機会がほとんどなかったことだ。
一夏とは対象的に半年間ただの一度もＩＳを操縦できなかった理由は、世界各国が関わった男性ＩＳパイロットの獲得戦である。
きちんと日本の国籍をもち、日本で生きてきた経歴をもつ一夏のことは、日本が”日本国のＩＳ操縦者”と堂々と主張できた。
対して徹は日本国籍こそあるものの、生きてきた経歴は１０歳以降のものしか残っていなかった。
それを日本側に追求された時に
「実は１０より昔の記憶がないんだ」
と言い訳したのが運の尽きだろう。
記憶がないこと自体も本来なら重大な問題だが、そんなことなんかは世界各国にとって些細な問題であった。
世界各国が重要だと捉えた問題は、１０歳より以前は日本以外の国にいた可能性があることだ。
これにより世界各国は一夏の獲得を早々に諦め、徹の自国への獲得に尽力することになった。
それにより一夏は自国にてＩＳについて詳しく学んだり、操縦の訓練したりする機会を得たが、徹はそういうわけにはいかないのである。
世界各国が、徹は１０歳以前には我が国の国民であったと主張しはじめたからだ。
そのおかげで各国から見知らぬ徹の家族を名乗る人物たちがう

じゃうじゃと毎日徹に面会にきた。
もちろん記憶喪失などは嘘だと、知っているから世界中から訪れる家族を名乗る人物は赤の他人ばかりなのだ。
……だいたいにしてハニートラップを仕掛けてくる姉や妹、挙句の果てには母親など存在するはずがない。
それでも、『前世があります！いきなり１０歳の少年の姿でこの世界に現れました！』と主張するわけにもいかない。
精神異常者と判断されたら何をされるか分かったものではない。
……最悪実験体扱いだろう。
ゆえに家族などではないということが分かりきっている人物たちとの無駄な面会を繰り返すはめになった。
各国からの圧力がかかった面会から逃げることなど不可能だから、半年間地獄の面会に次ぐ面会への参加は絶対だった。
せっかくＩＳへの適性があることが判明したのにＩＳに乗ることもできない上に、半年も赤の他人に作り話を聞かされたり、ときにはハニートラップを仕掛けられたり……
この争奪戦が”徹のＩＳ委員会の共同管理”という形で終結したのはＩＳ学園入学式の三時間前のことだった。
共同管理という、まるで物のような扱いは不服ではあったが面会地獄よりはマシなので徹も異論を唱えることはなかった。
疲れきった徹は、やっとＩＳを動かすことができる場所についたと、涙を流しながらＩＳ学園の土を踏んだ。
こうして世界初となる男性ＩＳ操縦者の学園生活が幕を上げた。
新人類はＩＳ学園にて何を感じるのか？

第四話

第二次ネオジオン抗戦にて、カグラ・トオルの心は壊れた。
カグラ・トオルはニュータイプ能力が高く、パイロットとして優秀な存在だ。一度、戦場を駆ければ敵機をパイロットを殺さずして、無力化していく。勝てない敵など存在しなかった。
しかし、カグラは本来なら戦いなどに関わるべきではなかった。
不殺という行為は人を殺さぬかわりに自分を壊していく。
敵機のパイロットを殺さずして生かす。敵も自分も死なせたくない。
敵から感じる守りたい場所、守りたい思い。
ニュータイプ能力による高い感受性は相手の心の中を覗かせる。
お互いに生きなければならない事情があることが知れた。
自分の技量なら殺さずとも敵を無力化できる。
不殺が甘さだということは分かっていても、この甘さを含めてカグラ・トオルだ。
そう自分の中で結論を出して戦いに臨んだ。
しかしその、不殺などという理想を追いかけ、戦場を駆ける日々は脆く崩れ去る。
現実はカグラの理想に対してあまりにも冷酷だった。
戦友が死んでいく。カグラは死なずとも、戦友は次々と命を落とす。
戦友の断末魔が聞こえてしまう。自分の能力を恨んだ。涙を流さぬ日などなかった。

それでもカグラは、自分が授かったこの能力は憎しみの連鎖を断ち切るためにあると信じた。
仲間を殺した敵も、敵の仲間を殺されている。
お互いが殺し、殺され、憎みあう。そんな連鎖を止めることができない。

そうして生まれる深い深い憎しみは、相手の傷つき、泣き叫ぶ心を踏みにじる。
終わりなき憎しみの連鎖は断ち切れない。相手の痛みを理解することなど憎しみに満たされた心ではできない。
ならば、お互いの痛みをキチンと理解できる自分は、憎しみ合う感情を留める受け皿とならなければならない。
憎しみの連鎖は自分の場所で留める。
死が憎しみの連鎖を作るなら、死など認めない。
そう思い、敵を殺すことはしなかった。
戦場で何度も何度も敵の命を見逃した。

だが結果として、カグラは理想を貫くことはできなかった。

戦友が更にひとり殺された。殺した相手は自分が見逃した敵だった。
そんなシチュエーションなど戦場ではありふれた存在となっていく。
激化していく抗戦の中の憎しみを受け止めるには、カグラという受け皿はあまりにも小さすぎた。
受け皿が憎しみで満たされた時、
カグラ・トオルは敵を”人”とは思わなくなった。

不殺をやめたカグラは凄まじい戦果を叩き出していく。
向けられる憎しみなどは無視した。
あれは人ではない。見るな。聞くな。同情するな。
いつも、戦場から帰還したカグラの顔は涙でグシャグシャになっていた。

第二次ネオジオン抗戦が幕を閉じたころ、カグラの心は疲弊しきって擦り切れ、砕けそうになっていた。
「いっそ、人を殺すのを愉しめるくらいなら……　こんな気持ちには

ならないんだけどな……」
カグラはいつの間にか涙を流すことができなくなっていた。

◇

一夏ｓｉｄｅ
「皆さん入学おめでとう。私は副担任の山田麻耶です」
「「「「……」」」」
「ｚｚｚｚｚｚｚｚＺＺＺＺＺＺＺ」
静まり返る教室。
聞こえてくるのは安らかな寝息だけ。
「え？
今日から皆さんは、このＩＳ学園の生徒です。仲良く助けあって楽しい三年間にしましょうね！」
今だに続く沈黙。
「はぅ……　じゃ、じゃあ自己紹介お願いしますね？
……　えっと主席番号順で！」
一夏は変に目立つことを避けたいがために返事をしなかったが、涙ぐむ副担任を見て少し罪悪感を抱いた。
誰も返事をしないのは流石に酷いだろう。
すぐ後ろの席の徹にいたっては、ぐうすか寝ている。つい三時間前まで自分の行く末を左右する会議に参加していたため、対して睡眠をとれていないせいではあるが、一夏はそんな事情は知らない。
だから教室に入るなり、一言も話すことなく眠りについた家族に驚いた。こいつこんなにだらしないやつだっけ？、と。
速攻で教室に着くなり眠りについた徹を除いても、このクラスには知り合い……　というか幼馴染がいるのだが六年振りの再会にも関わらず顔すら合わせてくれない。
これは……　嫌われてますね、間違いない（確信）

……だからとんでもなく気まずい。なぜこんな状況に追い込まれているのか。
楽しい学園生活が始まるハズではなかったのか。
「お、織斑一夏く～ん？」
「ハッハイ！」
そうこうしているうちに自己紹介の順番が回ってきたみたいだ。
急に声をかけられたからか？焦って返事にやけに力が入ってしまい、大きな声を出す。
……周りの皆に笑われた。恥ずかしい。
「お、大声だしてごめんね？
でも出席番号順だから順番だから！
自己紹介お願いしてもいい？」オドオド
「あ……すいません。元を辿れば話を聞いてない俺が悪いんです」
必死にオドオドしながら弁明をする山田先生にが可哀想になり、ついついこちらまで謝った。
いや……話を聞いていないこと自体は問題か。
クラス中の人の視線が突き刺さる。
何も考えていなかったから無難なことしか言えそうにない。
とりあえず席を立つ。
「え、えーと……織斑一夏です。
よろしくお願いします」
……なんだろう。このもっとなにか喋らなければならないような雰囲気は？
……う～む、何も喋ることはない。ならばこれで自己紹介を終わりにする意思表示でもすべきか？
「……以上ですッ！」
教室の生徒たちがずっこける。一体何を期待していたんだろう？
疑問に思いながら席に座る。
「え、えと？
次の織斑徹くんなんですけど？
なんでも三時間前までＩＳ国際委員会の会議に参加していたらし

く・・・・

疲れているようなので寝かせてあげて・・・・

「山田くん。そのような気遣いは無用だ。一夏、叩き起こせッ！」

教室に入ってきたのは、一夏の姉である千冬だった。なぜ？どうしてここに？

「千冬姉？なんｄ・・・・「学校では織斑先生だッ！」バキッ

脳天に一撃。頭がくらくらする。拳でご挨拶とは、また随分な仕打ちだと思う。

それにしてもなんで千冬がここにいるんだろう？

何の職業に就いているかは知らなかったけどＩＳ学園に勤めていたのか？

一夏は痛む頭を押さえつつ考える。

「はぇ？織斑先生？

・・・・・でも徹くんＩＳ学園に来る前まで三日くらい徹夜で連日会議だったって・・・・・」

「無論、知っているが、だからと言って今眠る許可をだすわけにもいかん。

・・・・・・そうだな。まずは担任として私も自己紹介をする必要があるだろうな。

諸君、私が担任の織斑千冬だ！

君たち新人を一年で使いものになるようにするのが仕事だ。

私の拳は男女平等だから、覚悟しておくように」

（千冬姉が担任～！いやいやそれどころかＩＳ学園に勤めていたのか？まったく知らなかった・・・・）

それにしてもいきなりこのご挨拶とはなんという独裁っぷりだろう。あれだぞ？今教師の体罰には厳しい世の中だぞ？

「「「キャーーーー!!!!」」」

ぐぁあああああああ耳がやられたぁあああああああああああ!!!

「本物の千冬様よ！」

「お姉様に憧れてこの学校に来ました！」

「なんだ！敵襲か？敵襲なのか？」ガバッ

「むしろ千冬様の拳はご褒美ですッ」
耳がイかれてしまった。頭がキンキンする。予想をはるかに上回る声の音量だ。
あまりのうるささに先程までピクリともしなかった徹も目覚めた。
「敵襲？敵？あれ？」
・・・・・ 訂正。今だ目は覚めきっていないようだ。
千冬はうっとおしそうに頭を押さえながらため息をつく。
「毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ・・・・
私のクラスにだけ集中させてるのか？」
いまだに騒がしい黄色い声が飛ぶ中、千冬は徹をキッと睨みつけながらそのまま近づいていく。そしてメキメキ、ミシミシと音をたてるくらい力強く徹の肩を握りしめ、声をかける。
「今の今まで寝ていたとはいいご身分だな？
とっとと自己紹介をしろ、お前の順番だッ！」
千冬にドヤされ徹は立ち上がる。
千冬にやられた肩を押さえながら涙目で立ち上がる。
なんかさっき山田先生が徹が三徹してるとか言ってた気がするのも重なって一夏は同情した。
「・・・・・・・ まず初日にも関わらず睡眠をしていた無礼をお詫びいたします。すいませんでした。
えーと、織斑徹です。
そこにいる織斑先生たちの家の養子？に当たるんでしょうか？
元々は日本ＩＳ専高に入るつもりだったのでＩＳについての知識は最低限はありますが、それでも分からないことも多いと思います。
そのときは助けていただければ幸いです」
案外真面目な自己紹介だった。
というか・・・・ このくらいは話せて普通なのかも・・・・・。
「え？千冬様の家の養子？なにそれ私もなりたい」
「あとで詳しく聞かねばなりませんね」
いまだに女子たちは騒がしい。
と、いうかこのくらい元気があるなら山田先生にも反応してあげて

欲しかった。
「静かに！
諸君らには半年でＩＳの基礎知識を習得してもらう。その後実習だが、基本動作はすぐにマスターさせる。半月以内だ。
よければ返事をしろ。よくなくても返事をしろ」
「「「はいっ！」」」
よくなくても返事をさせるってどうなんだろう？

◇

「くっそー寝不足なのに容赦ないなー千冬さん」
肩が痛い。肩を砕くつもりだったのだろうか？
「よっ久しぶりだな徹！
聞いてくれよ？俺もＩＳ好きになったんだぜ！」
俺”も”とはなんだ。まるで俺がＩＳ好きであるかのような言い方をしおってからに。
・・・・・・・ うん。
久々に会う親友はまったく変わっていなかった。
教室は騒がしい。女子だらけの教室とはやはり落ちつかないものだ。
ん？なんだろう？強い視線を感じる。
いや世界初の男性パイロットであるから見世物であるかのごとく視線が集まるのは当然だが・・・・ 一際強い視線を感じた。
・・・・ ふむ。あの女の子が一夏と話したそうだ。
「・・・・・ なぁ一夏君？あの女の子は知り合いかなにかだろう？向こうさんはお前に用があるみたいだぜ？」
「ん・・・・ ？あぁ箒か。六年前に引っ越してしまった俺の幼馴染だよ。それにしてもよく知り合いだって分かったな」
「まぁ勘みたいなものさ。・・・・ 六年振りなら積もる話もあるだろ。先

に向こうを優先してあげるといい」
「……悪い。じゃ久々に箒と話してみるよ。ありがとな」
一夏が話しかけると、箒と一夏は教室を出て行った。
取り残された徹は教室中……いや廊下からも注がれる数多の好奇の視線にただひたすら耐えることになった。
「格好つけてはみたが……この視線は心にくるものがある……一夏君……早く帰ってきてくれ……」
その視線に乗せられる好意の感情はやはり徹には届いていない。

第五話

「ではここまでで質問がある人ー！」

山田先生の声が教室に響く。

半年の予習の成果が出ているため一夏もなんとか授業についていけていた。

この世界に生を受けて以降はひたすら敵情視察と称したＩＳの勉強をしてきた徹には、なおさら理解できぬところなどなかった。

「うん♪皆さん理解できているみたいで先生嬉しいです！」

山田先生はにっこりと微笑む。オドオドしたり、今のように笑ったり。

感情豊かで愛されるべき教師だな、と徹は思う。

（それに・・・・ 山田先生の授業は分かりやすい。事前に予習をしていればついていくことは容易だろうな・・・・）

目の前の親友はそれでも授業についていくのがギリギリだとは思うことはなかった。

休み時間。

先の授業で一夏が理解できなかったところを徹が解説していた。

「あ・・・・・ あーそういうことか。サンキュ、徹」

「おいおい一夏君。言っておくが、まだ基礎中の基礎の段階なんだぞ？ここで理解できないことがあるなんて・・・・・ なんというか・・・・・本当に半年勉強したのか？」

徹は少し呆れた顔をする。

だが前世でより複雑なＭＳに関わっていた徹は問題がないように感じているが、実際ＩＳ学園で学ぶことは相当に高度な学習内容なのだ。

並の人間ならば、半年程度予習したところで授業にはついていくのが精一杯で完全に理解することは難しい。

つまりそもそもの基準がおかしい。

物覚えに関しては一般人の一夏にとって授業は少しばかり難解であった。
ゆえに基礎中の基礎にすらついていくのは難しい。むしろその全てを完璧に理解できている周りの生徒が異常なんだと一夏は思うが口には出さない。
……　徹は案外努力を怠る人間には厳しいからだ。徹の中の基準がそこである以上、下手な言い訳は自分の立場に響く。
「いや……　俺はそんなに物覚えが良い方じゃないからｎ
「ちょっとよろしくて？」
会話の流れを切る形で女の子が一夏と徹に話しかけてくる。
完全に台詞を重ねる形で声をかけられた一夏は少しふてくされたが、それを顔にはださなかった。
……　ロングの金髪をロール状にした貴族風の女の子。
こちらから女子には話しかけずらかった徹たちにとっては、遠くからヒソヒソと話されるより、こうして話しかけてくれる方がよほどありがたい。
だからセシリアの第一印象はふたりにとって悪くはなかった。
「え……　と？……
「オルコットさんだよ一夏君。学友の名前くらいは、覚えておくべきだよ。
で、なんの用事ですか？オルコットさん」
一夏は自己紹介の時に寝ていたやつがよく言うなと思った。
しかし実は徹は入学前にクラスの人間はキチンと把握していたのだ。
渡された名簿と顔写真を見比べておき、クラスの人間の顔と名前くらいは一致するようにしていた。
ゆえに……　あの自己紹介の時間に寝てしまっていて損したことは肩の痛み程度であった。
「あら……　少しは感心いたしましたわ。徹さんと言いましたかしら？この学園に所属しただけはあって、ただの猿ではないようですね？
それと一夏さんでしたか？あなたはもう少し精進しなさいな。

わたくしに話しかけられこと自体が光栄なのですからそれ相応の態度で応じなさい」
ふたりの抱いた第一印象はもの凄いスピードで崩れ落ちた。
……典型的な女尊男卑型の人間だろう。
徹は先にＩＳを嫌う建前として女尊男卑社会への嫌悪を示したが、女尊男卑を嫌うこと自体は建前ではなかった。
一夏もいきなり現れて尊大な態度をとりはじめたセシリアにはあまり良い気持ちは抱かなかった。
それでも気をとりなおして会話を計る。
教室の知らない女子とのファーストコンタクトだ。なるべく穏便に済ませたい。
「悪いな……徹と違って俺は少しもの覚えが悪いからな。君が誰かもわかってないんだ」
「ッ！わたくしを知らないッ？
わたくしはセシリア・オルコットですよ！イギリスの代表候補生で入試主席のわたくしを知らないとは！
……あまりに知識がとぼしいのではなくて？」
そうか。代表候補生だったのか。
国を代表するＩＳ操縦者である国家代表の候補生ともあらば相当なエリートなのだろう。
この尊大すぎる態度も溢れる自信を表しているのかもしれない。
「オルコットさん？信じられないことだとは思うけど一夏も入学したばかりで慣れてないとこがあるんだ。許してやって欲しいな」
徹が頭を下げる。
うーん。悪いのは向こうの口のような気がするから徹が頭を下げる必要はないんじゃないかと思う一夏である。
「本当に信じられませんわね。日本の男性とは全てこのように知識が足りていないのでしょうか？
わたくしセシリア・オルコットが代表候補生であるということなど、常識でしょう。
その常識すら理解できてないなようでは学生やＩＳ操縦者以前に

人として心配になりますわ」
うわぁ・・・　さらに一夏への罵倒が留まる気配がない。
普段ならば否定してやりたいところだが、徹とて、この女の子に不都合な指摘をしようものならどうなるかくらいは分かっていた。
あの罵倒の対象が自分へと切り替わるだけだ。
徹は一夏を犠牲に面倒ごとを避けることにした。
「本来ならばわたくしのようなエリートと教室を共にできるだけでも奇跡！その幸運な自分をもう少し認識すべきではなくて？」
「そ、そうか。それはラッキーだ」
「オルコットさんの足を引っ張ることがないように最善を尽くすよ」
正直、女尊男卑に染まりきっていたとしても、この自分絶対主義は痛々しすぎる。ふたりはセシリアの発言の数々にドン引きしていた。
ふたりがドン引きしていることにも気付かずに、セシリアは更に言葉を続ける。
「ふふん。まぁでも？優秀なわたくしはそのように野蛮なおふたりでも見捨てるようなことはいたしませんわ？優しくしてさしあげます。
そうですわ？泣いて頼まれればわからないことなどを指導してさしあげないこともないですよ？」
「はははは・・・・・・　よろしくお願いいたします」
いつの間にか一夏と共に蛮人扱いを受けていることも、黙って受け入れて乾いた笑みで応じる。
「そうやって最初から素直に返事をしていればいいのです。
なにせわたくしはつい一ヶ月前に実装されたばかりの新技術搭載型の試験兵器を使いこなすエリートであり、
さらに入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートなのですからね」
「んにゃ？俺も倒したぞ？教官？」
この時ばかりは一夏を恨んだ。なぜ会話が終わろうとしているのに、また話題を振りまくのだろうか？
「ハァッ？」
案の上、セシリアは驚愕の表情をしながら詰め寄ってくる。

「い、いや倒したというより突っ込んできた相手を避けたら壁に激突して動かなくなったというか……」
「徹さんはどうなんですかッ？」
うげっ。対象が徹に切り替わる。
「お、俺の場合は特殊な事情があってね。入試自体パスだったんだよ」
徹の場合は、所属を決めるのに時間がかかり過ぎて入試など形式的にすらやる時間がなかった。
ゆえに時間の都合で入試はパスされたのだが……
それを
「俺はスーパーエリートなので入試を受けることすらなく入学したよ？」
とセシリアは捉えた。
「クッ……あなたたちは人を馬鹿にするのが随分お上手みたいですわね！」
その結果、セシリアは怒りに震えていた。
セシリアのその台詞の直後に授業開始を告げるチャイムがなる。
「ッ！わたくしのプライドを傷つけた代償は後々必ず払ってもらいますからね！逃げることは許しませんからね？よくって⁉？」
と捨て台詞を残して去っていった。
なぜひたすら罵倒されたあげくにこんな扱いを受けねばならないのか。
セシリアの理不尽さにふたりはため息をついた。

ＩＳ学園は全寮制を取り入れている。
つまり昼も夜も各国から集まった操縦者たちはＩＳ学園の敷地内にて暮らすことになっている。
基本的に寮は二人部屋となっている。
そのため男性である一夏と徹は当初同室であることが提案された。
しかしこれに各国が大反対。
大義名分としては、『同じ場所に男性操縦者を二人も集中させてい

れば、その分リスクも高まる』というものが掲げられていたが、
実際はハニートラップの機会を増やすために徹の部屋には空きをつくっておきたいという浅ましい思惑があった。
ゆえに徹はふたり部屋をひとりで使うことを命じられた。
１０２６号室。一夏の隣の部屋である。
同室の人間は”まだ”いない。
いずれ、自分の妹を名乗る人物を転校させ、同室にするとのお達しがあった。
なんでもフランスの人間らしい。
たしかにカグラの見た目を引き継いでいる徹は、純粋に何人と判断することは難しい。
でも、間違いなくアジア系の顔立ちの筈だ。一体何をどう見たらフランス人に見えるのか？
「まあフランスはＩＳ開発において他の先進国に一歩遅れをとっているからな……。男性ＩＳ操縦者の獲得には本腰を入れざるをえなかったのかもな」
そう。厳しい徹の同室の権利を勝ちとったのはフランスなのだ。
先進国にも関わらず、第三世代のＩＳの開発が上手くいっていないこともあり、この件かける本気度が他の国とは一線を異にしていた。
それに、他の国々は、面会時にいくらハニートラップを仕掛けてもことごとく返り討ちにされている現状から、同室権利に男性操縦者発見直後に一夏との同室を許さなかった時ほどには魅力を感じなくなっていたのだ。
余談だが、各国では徹は女性に興味はないのではないかという噂がまことしやかに囁かれた。
……徹にはそっちの趣味はないため普通に女性には弱い。
返り討ちにはしているもののハニートラップは徹に絶大な効果がある。
女性との関係がなく、経験のない徹はドキドキして顔を真っ赤に染めるだろう。
でもそのようなことをされて顔が真っ赤になろうと、徹は正気のま

まで相手を説教する。
「女性であるのにはしたない」
だとか
「自分の身体を大切にしなさい」
だとか説教をする。
徹は無駄に軍で鍛えてきたわけではないので、力で無理やり屈服されたりはしない。
そして何より問題なのが色仕掛けをくらっても理性を失わないことだ。
軍で養われた強い精神の軸は簡単にはぶれない。
だからハニートラップを仕掛ける人物をことごとく説教して追い返してきた。追い返すことができた。
「ま、またあのような迫られ方をするのだろうか？
うぅぅ・・・・ 勘弁してほしい」
しかし徹は、ハニートラップを役得と思えるほど女性慣れはしていないので恥ずかしさに悶える。
おっさんの中身を引きずりながらも徹は思春期。
女性の甘美な魅力に悶々とする夜もあるのだ。
そのことについて悩んでいたからだろうか？
徹は隣の部屋でおきた事件に気づくことはなかった。
「ま、待て箒！話せば分かる！」
「問答無用だァーー!!」

こうして一夏と徹はＩＳ学園での波乱万丈の初日を終えた。

第六話

織村徹がＩＳ学園に入学する前に残した実績はＩＳ業界に革新を促した。

彼がＩＳ学園へ入学する半年前。

ＩＳ委員会に向け、量産ＩＳ”ＪＥＧＡＮ”を発表した。

研究されつくしたと思われていた、ＩＳの基礎設計を見直し、誰も思いつかないような技術を使用して無駄を消しさり機能の上昇に努めた。

・・・・・世界各国がどんなに頭を振り絞っても思いつかなかった技術の数々にはそれひとつひとつが特許取得に充分な代物なのだから驚きだ。

さらに兵装に関しても多大な成果を残した。

特に評価を受けているのはビーム兵装の分野である。

エネルギー効率がよろしくないがために強力だが運用をあまり好まれない場合も多かったビーム兵装。

それというのもビームの光線にまとまりがなく空気中に霧散することを止める術がなく、拡散分のビームまで同時に打ち出さねば実用できないという問題があった。

だが、徹が発見した粒子、通称〝ミノフスキー粒子〟はこの問題の解消に成功している。

ミノフスキー粒子は静止質量がほとんどゼロであり、正負いずれかの電荷を持つ粒子である。これらが静電入力と特殊な斥力によって交互に整列して立方格子上の不可視のフィールド（これを徹はＩフィールドと名付ける）を形成する。このＩフィールドには様々な効果があるが、そのうちのひとつにビーム兵器の収束、偏向がある。これにより先に問題としてあげられた空気中に霧散していたビームが収束され、エネルギー効率が大幅に上昇した。

ミノフスキー粒子をＩフィールドによって圧縮し、縮退・融合した

ことによりできあがったビームを撃つビーム兵器は従来のビーム兵器を遥かに上回る高い能力を発揮した。
このミノフスキー粒子使用型のビーム兵器はいずれ全ＩＳで運用されるだろうとまで言われている。
その高い基礎性能と強力なビーム兵装をいち早く搭載し、且つ量産に問題がない（ただしミノフスキー粒子の実用に関しては徹にしか知識がないため量産化は難航すると予測されている）レベルまで仕上げたＪＥＧＡＮの原案はある程度そのまま採用され、各国が量産化を検討した。
ただしそのまま採用されたのは〝ある程度〟。ところどころ、徹自身が関わらねば未知の技術すぎるために手を出すことが難しい部分や、無駄と判断された部分は変更を余儀無くされていた。
無駄と判断された部分の一例は全身装甲であることだった。
全身装甲ではない機体を新たに各国各自、独自に自国のみで再現できる技術以外は省いた形で設計し直して〝ＪＥＧＡＮ〟の量産体制確立に向けて動いてく。
ＪＥＧＡＮの発表を通して、ＪＥＧＡＮに自国なりのアレンジを加える国や、その技術を自国の第三世代の機体へ応用を図る国もあった。
世界各国のＩＳはＪＥＧＡＮの開発によって変革を余儀無くさせられた。
それほどの変革を促す成果をたかが一介の中学生であった徹が残したのだ。
委員会と各国が共通してＪＥＧＡＮという機体の存在、又はその技術や技術の出どころを機密情報とし、各国のＴＯＰレベルのみの知るところとしたために徹が表だって評価を受けることはなかったが、事実を知る人間たちからはこう評価を得た。
〝束博士の再来〟……と。
なお、徹は委員会にＪＥＧＡＮの設計を開示するにあたっていくつ

か”お願い”をしていたようではあるが、その内容は明らかにされていない。

◇

「これより再来週に行われるクラス対抗戦の代表を決める」
クラス代表か・・・・。クラス対抗戦で得られるＩＳでの戦闘経験は正直魅力を感じてはいた。
（ＩＳは嫌いだが戦闘で身体を動かすのはいいことだしな。うん）
と苦しい言い訳をひとりで考える。
しかしどういうわけかこの代表はクラスの室長も兼任するようだ。
これには徹も若干の躊躇を感じる。
室長という仕事自体を嫌うわけではないのだが、室長ともなれば学園の委員会や生徒会と連携して仕事をしなければならない機会も増えるだろう。
そうなることはすなわち自分の時間が削られることになる。
（と思ってみるが・・・・ まあ自分の時間ができたところで別段やりたいことがあるわけではないしな・・・）
「自ら志願するもよし。他人を推薦するもよし。
誰かいないか？」
そうこうしているうちにクラス代表の選考が始まった。
まずは一人の女子生徒が一夏を推薦した。
「私も織斑君がいいと思います！」
「私も賛成です」
「私も織斑君を希望します！」
クラス中から賛成の声があがる。
・・・・ 凄い人気だな一夏君はーと思う徹だったがなんか負けたような気分になりムッとする。

「私も織斑君・・・・ 徹君の方で！」
「あ、どっちも織斑君か・・・・ 私は一夏君の方です」
「私は――――
「私も――――
「私は――――
・・・・・・ 自分が織斑と呼ばれる経験はあまりなく、基本的には徹と呼ばれてきたのでその可能生が頭から抜け落ちていたのだろう。
織斑君コールの中には徹を望んでいた人もたくさんいたのだ。
一夏と徹。人気は五分五分といったところか。
「・・・・・・・ ハァ。静かにしろ。この二人以外に立候補や推薦はないのか？
なければ二人の決選投票になるぞ？」
一夏が冗談ではないとばかりに顔を歪ませる。
徹は無表情を装いつつソワソワしていた。
（いや、困ったな、このままでは、代表になってしまうぞ、代表になれば自然とＩＳに関わる機会も増えてしまうではないか。いや、困ったな）ニヒッ
・・・・ 無表情を装いきれないなんともわかりやすい男である。
「ーーー納得いきませんわッ！」バンッ
机を強く叩きながら異義の申し立てをしたのはセシリアだった。
「そのような選出は認められませんッ！男がクラス代表であるなどと・・・・・ とんだ恥さらしですわ！
このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間も味わえとおっしゃるのですか⁉？」
・・・・・ 先日の会話で気づいてはいたが、どうやら彼女はそうとうに見ている人の頭を痛くさせる子らしい。
世の男性たちを悩ませる女尊男卑の体現者だった。
更に彼女の言葉はヒートアップしていく。
「実力の点で言えばこのクラスに置いてクラス代表にふさわしいのはこのわたくし以外の選択肢はそもそもありえませんわ！」
「もの珍しいだけの男性操縦者がクラス代表など・・・・ このクラスの

威厳に関わりますわ！」
「大体！文化として後進的なこのような極東の島国で暮らさねばならぬ時点で私にとっては耐え難い苦痛――――
「むッ！言わせておけば好き勝手言いやがっｔ」モガッ
　自分の住む国を悪く言われて頭に血がのぼったのだろうか？突然立ち上がり抗議の声をあげようとした一夏。
　しかし一夏の口は徹によって塞がれた。そして一夏の言葉を遮ると、徹はこんなことを言い出した。
「あ～なら俺はオルコットさんを推薦します。
　俺に投票をくれたみなさんの期待を裏切るわけにはいかないし、辞退はできないけど・・・・　これでオルコットさん？君も代表候補だよ？」
　徹はこれで丸く収まるのではないかと思っていた。
　しかしその予想には反し、セシリアは顔を真っ赤にしながら怒っていた。
「ッ・・・・・　馬鹿にしてッ！
　わたくしがいつあなたなどに代表になる権利を与えて欲しいなど頼みましたかッ！
・・・・・　いつだってあなたがた男性はそうです。女性に媚びへつらい、こちらの機嫌を損ねないようにビクビクしてッ！
　そのような態度の男性がわたくしは一番嫌いなのですッ！
　言いたいことがあれば声を大にして主張しなさいッ！」
・・・・・・　徹は軽くあしらおうとしたことを少しばかり後悔した。セシリアの心からは今の女尊男卑の風潮への激しい敵意を感じたのだ。先ほどまでの驕り高ぶった態度からは想像できなかったが、セシリアにはセシリアなりに今の世の中に思うことがあるのだろう。
　男性と女性ゆえに感じることは違えども彼女もまた、今の社会のズレを認識していたのだ。
「・・・・　決闘ですわ。ここまで侮辱されたとあればそれ相応の報いは受けてもらわねばなりません。
　この決闘の勝者をクラス代表としましょう？

……　わたくしが勝った場合はクラス代表として、あなた方おふたりのその腐り切った性根を叩き直して、よーく躾けてさしあげますから覚悟しなさいな？」
その言葉を受け、一夏がセシリアに向けて言葉を発する。
「……　いいぜ。決闘か。四の五の言うよりよっぽどわかりやすい。クラス代表になりたいかって話は抜きにしてもあれだけ言われて逃げるわけにもいかないしな」
決闘をする流れになってきた。
ＩＳ学園における決闘ならばそれはＩＳ同士の戦いを示すのだろう。
「たしかに……　話し合いではらちがあかんようだな。そうなると、セシリアの実力の有無で判断するという決闘という提案もひとつの手段だろう。いま候補に上がった三人が総当たりで模擬戦をしろ。その勝者をクラス代表とする」
千冬もこの決闘に賛同のようだ。
「先生から許可さえ出れば反対する理由もないね。……　それに先ほどの”俺”の君に対する侮辱を言葉で謝罪することはできなさそうだし……
全力の力で望むことで謝罪の代わりとさせてもらうよ」

◇

「次の月曜……　第三アリーナにて決闘か……」
二人部屋に一人でいるせいだろう。
やけに広く感じる部屋の中で徹は一人もの思いにふけっていた。
……　徹のＩＳの総稼働時間は数時間前後だ。基本的な動きかたしか理解できていない。
「俺の専用機……　こちらに届くのはたしか模擬戦の前日だよ

な・・・・」
徹はＪＥＧＡＮの情報を開示する条件のひとつとしてＩＳ委員会に、自分好みの専用機を用意することを依頼した。
有志で各国から数名ずつ機体の制作に関わる人を呼び出して。
重要なプログラムは全部自分で調節したし、完成見取り図では前世の愛機が見事に再現されていた。
前世の最高の相棒は今世でも変わることなく徹を助けてくれるだろう。
世界で唯一の”全身装甲のジェガン”だ。
基本装備しかまだ制作されておらず、かねてから頭の中では計画していた拡張領域をしようしたスタークジェガンへの換装は不可能ではある。
それでも第二次ジオン抗戦をともに生き抜いた愛機との再開には胸が踊った。

「・・・・・・ＩＳの稼働時間を言い訳にするような真似はしないさ」
幸い、前夜のうちにジェガンでのアリーナ使用許可を一時間だけ千冬が用意してくれた。・・・・・ＭＳを操縦する感覚をＩＳを操縦させる感覚と一致させることさえできるならば、本来の力を発揮できるはずだ。その一時間でＩＳの感覚を身体に染み込ませなければならない。
「戦場じゃあもっと切羽詰まった状況なんていくらでも有った。このくらいの試練、乗り越えてみせるさ」

戦いへのカウントダウンはもう始まっている。

第七話

『専用機。今しがた完成致しましたよ徹”博士”』
「え？本当ですか？到着予定時刻は？」
『前回お伝えしたとおりですよ博士』
ＰＣ画面越しに話かけてくるのはジェガン作成プロジェクトの副主任である倉田　涼子（くらた　りょうこ）。
国際ＩＳ委員会に所属する技術・開発部主任である女性でジェガン作成にあたって随分協力してもらった。
そもそもこの人に徹が専用機を求めたことが、ジェガン作られたきっかけである。
「それにしても博士はやめてくれませんかねぇ・・・・。たしかにＪＥＧＡＮの開発者は俺ですけど博士なんて少し恥ずかしいですよ」
徹は顔をしかめる。不本意ながらＪＥＧＡＮを世に送り出して以降、徹は博士という扱いを受けている。
ジェガンプロジェクトにおいて集まった技師たちはそんな徹”博士”個人を慕って各国から自分の意思で訪れている。
倉田が個人のつてを使い人から人へと伝えた
〈徹博士が主任を勤めるＩＳ作成プロジェクトに参加しないか〉
という国を越えた求人募集は世界各国様々な人々を集めたのだ。
徹が博士と呼ばれるほどの功績を挙げたことを知っているのは、一流企業の技術者や、お国お抱えの技術者たちばかりだった。
これらの技術者の多くは徹から与えられたＪＥＧＡＮのデータの解析で忙しく、徹の専用機作成などには関われそうもなかった。
けれど徹を慕うがために、人によっては仕事を辞めてまで集まった技術者集団。
彼らがジェガンを作り出した。
・・・・　ＪＥＧＡＮを作り出したその圧倒的発想に心惹かれた彼らにとって、この徹が直々に主任を勤めるプロジェクトはとても魅力的で

あったのだろう。
　自分の今の仕事を投げ出してでも新たな技術に直に触れ合いたいのだ。
　そんな人々にとってはやはり徹は博士だった。
『博士自身が博士であることを嫌がってもあなたは博士なんですよ。つべこべ言わないでください！
　それとも？主任とお呼びしましょうか？』
「い、いや・・・・・　なるべくどちらも遠慮させていただきたい・・・・・
　それにしても倉田さんには頭上がんないなぁ・・・・　協力してくれたみなさんにも感謝の言葉を伝えておいていただけますか？」
『ん・・・　了解です。彼女たちにしっかり伝えておきますね』
　おそらく、多分、偶然ではあるはずだし、徹は気にもとめていないがプロジェクト参加者にはなぜか女性が多かった。

「あ、それと倉田さん。ひとつ聞いておきたいことがあるのですが？」
『はい？なんでしょうか博士』
「・・・・・・　俺のコアはどこから入手したんですか？倉田さん個人にコアを手に入れる手段が？」
『いや、とてもではないですが私個人にＩＳコアを手に入れるほどの権限はありません。
　世界でも二人しかいない男性操縦者のＩＳコアを他国や企業から譲り受けるわけにもいきませんし他国の力を借りたわけでもないんです』
「ならばそのジェガンのコアは？」
『これは正確には”４６８”番目のコアにあたります。私の手元へ束博士から届けられたものです』
『コアには伝言を書かれた紙も貼ってありました。そこにはただ一言近々直接、徹博士に会いに行くといった意味の言葉が綴られていました』
　どうやら徹は何がきっかけかはわからないが天災の視界に入ってしまったらしい。

◇

「よし……こんなものか」

模擬戦当日。徹は自室にて試合直前、最後の機体調節を終えた。機体は前日アリーナにて一次移行（ファーストシフト）を終えたばかりだ。

徹のＩＳの待機形態は地球連邦軍のロゴが刻まれたペンダントである。

（しかし、この中に機体が待機されているとは……いまだに量子化という技術はよくわからないな……）

理論上では理解できても納得がいかないものである。

一次移行による機体の形状変化もその身で体感したが、なんだかとんでもない技術だなと思った。

設計段階では通常のジェガンだった機体が、一次移行を終えると、スタークジェガンへの換装を前提に作成されたジェガンＤ型へと形状が微妙な変化を見せた（具体的には肩部や股間部にオプション用のマウントラッチが追加され、形状もやや異なるものとなった）のだ。

……いずれスタークジェガンへの換装パッケージ製作と並行してオプション用のマウントラッチも製作しようと考えていたのだがその手間が省かれた形となる。

アリーナでの一時間は久々の愛機との時間だった。

機体に乗ることは心地よく、どこか懐かしい気分にさせられた。

……前日、アリーナにて確認してわかったことは、いくつかあった。

その中でも特筆すべき問題点がふたつあった。

まずひとつは、ＭＳとＩＳの操縦には若干の”ズレ”があるという点だ。

ＭＳは全長２０ｍにも及ぶ巨大な兵器だがＩＳにはそれほどの大きさはない。
それにより情報の伝達スピードが大きく異なる。
さらにＩＳは、頭で描いた動きをほとんどタイムラグなくおこなうことが可能なこともあり、一度コクピットで入力した操作を２０ｍにも及ぶ機体に伝達してから動くＭＳの感覚とではコンマ数秒のズレは避けられないものであった。
コンマ数秒のズレ。たったそれだけのズレではあるが、ＩＳにおける高速戦闘下ではそのズレは致命的なものだ。
これは予想に過ぎないが、コンマ数秒の感覚のズレを修正できない限りはビームライフルを動きながら敵に当てることは難しいだろう。
ＭＳを動かしてきた感覚は身体に染み付いているため変えることは容易なことではない。
反射的に染み付いていた感覚は、無論昨日の一時間程度では修正されてはいなかった。
もうひとつは、量子化された武器の呼びだしがうまくいかないことだ。
できることにはできるが、データになっている武器を呼び出すという感覚がいまいち掴めない。
そのため最短でも数秒。下手したら十数秒ほども武器の呼びだしに時間がかかってしまのだ。
これではとてもではないが戦闘中の武器の切り替えなどは不可能だろうと推測される。
隙が大きすぎるのだ。
そのため、当日は基本的に最初から手に持っているビームライフル、シールド及びそれに内臓されているミサイルと腰の部分に取り付けられているビームサーベル、頭部に取り付けられているバルカン・ポッド・システムのみの使用となるだろう。
だが残念な知らせばかりではない。
瞬時加速（イグニッションブースト）の使用は徹にとって何の

問題でもなかったことも分かった。
ＩＳの後部スラスター翼からエネルギーを放出し、その際に得られる慣性エネルギーの利用による爆発的な加速。それが瞬時加速である。
この瞬時加速とは難易度が高い技であり、とうていＩＳ初心者の使用できる技ではないハズだった。
急激な加速により、身体にかかる負担が尋常ではないからだ。
しかし宇宙での戦闘においては常にＧが発生していたので、その類の負担については慣れきっていた徹には何の問題もなかったのだ。
背部のバックパック内部に設定しておいた高速移動用のエネルギーを使用して一度瞬時加速をしてみたが、耐Ｇの経験により辛いものでもなかった。
これならば連続した瞬時加速の使用にも問題はないだろうとまで感じた。
「おーい徹～。千冬姉が呼んでるぞ。試合の準備をしろだってさ」
一夏から呼びだしがかかる。すぐさまアリーナの待機室へと移動を開始する。
試合は、まず最初にセシリアと徹が戦うことになっている。
理由としてはたった今届いた一夏のＩＳはまだ一次移行が済んでいないことがあげられる。
なので一夏のＩＳの一次移行中に先にセシリアｖｓ徹戦がおこなわれることとなった。
《セシリアさんはもう先にアリーナ内にて待機しています。徹くん、準備はいいですか？》
「はい、今出ます」
山田先生から通信が入る。なんだかオペレーターに話かけられているみたいだ。
「総員・・・・第一次戦闘配備・・・・・だな」ボソッ
戦闘前の独特の緊張感。
この張りつめた空気さえもなつかしく徹の気分が徐々に高揚していく。

ＩＳを身に纏う。大丈夫。翔べる。
「織斑　徹、ジェガンＤ型ッ！出る！」
扉が開くと同時に外に飛び出す。
アリーナに飛び出すと視界にセシリアのブルー・ティアーズが確認された。
セシリアがこちらを見据え、少し驚いた表情を見せる。
「全身装甲……　一次移行は済んでいて？」
「もちろん。これが俺の理想の機体だよ」
対する機体はブルー・ティアーズ。
イギリスの第三世代ＩＳだ。
機密情報が多く、戦闘情報を詳しく得られなかったが（情報の収集に関してあまり積極的でもなかった）射撃型の機体であるという概要はわかった。射撃型の機体と戦うとするならば撃ち合いが一番スタンダードな戦い方だろう。
（ブルー・ティアーズのは射撃型の機体……。となれば撃ち合いにおいては感覚のズレがある限りこちらが不利だろうな……　接近戦ができればあるいは……。
だが相手は代表候補生。簡単に近接戦にもちこませてくれるとも思えないな……。
この戦闘を通してＭＳ乗りの感覚を馴染ませるしかないぞ。
……　辛い戦いになりそうだ）
だが辛い戦いにこそ意味がある。
不利な状況であろうと、もがくことで人は成長していく。
抗えば必ずその先に光を見ることができる。
「最後のチャンスをあげますわ？
わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。今ここで謝るというのなら許してあげないこともなくってよ？」
「……　辞退させてもらうよ。
その上で君に教えてあげよう。チャンスは与えられるものじゃなくて掴みとるものだってことをね」

戦いの火蓋はここに切って落とされた。

第八話

「さぁ踊りなさい！わたくしセシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

試合は開始直後から一方的な展開となった。
セシリアが攻撃し、徹が逃げ回るという構図だ。
セシリアに対して、徹は反撃の姿勢をとらずに、一定の距離を保ちながらアリーナ内を旋回している。
驚くべきは、徹が防戦一方なのにも関わらず、ジェガンのシールドエネルギーがほとんど減っていないことか。
ブルー・ティアーズのスターライトｍｋ”ＩＶ”から放たれる銃撃の嵐。
そのほとんどを前世での戦場の勘で回避する。
避けきれない分はシールドでいなし、防ぐ。
「シールドなんて珍しいものを持っているだけはあってなかなか頑丈なようですわねッ！」
セシリアは高威力の攻撃を連発しても相手のシールドエネルギーがほとんど削れていないことにいらだちと焦りを感じていた。
素人目でみれば状況は明らかにセシリアが有利だろう。
しかし、攻撃をあれだけ加えても減らないシールドエネルギーは下手な反撃より恐ろしかった。
セシリアのレーザーライフル『スターライトｍｋＩＶ』は英国が最近組み込んだミノフスキー粒子をつかった技術が使われている。
ミノフスキー粒子は誰が発見したのかが不明な粒子だ。
ミノフスキー粒子、及び同一人物が発見したといわれる全ての技術は数ヶ月前、ＩＳ業界に大きな波紋を呼んだ。
世界中がこの新たな技術の研究に尽力するようになったこの改革は『ミノフスキーショック』と呼ばれている。

その影響力の高さからミノフスキーショックの原因は束博士であるということが、現在もっとも有力である一般的な解釈だ。
（重ね重ねの説明になるが、ミノフスキー粒子の発見者が徹であることは機密情報で各国でも知る人間は少ない）
このミノフスキー粒子を使用する兵器はまだまだ試作段階ではあるが、従来のビーム兵器、レーザー兵器を遥かに上回る性能を発揮する。
まともに命中すればシールドエネルギーをごっそり削る恐ろしい武器である。
それゆえシールドなど一撃、二撃当てれば融解するものだと考えていた。
だが予想に反して徹のもつシールドは耐久値が高かった。
なんらかの技術でシールドエネルギーを消費しつつ身を守るなら理解できるが、徹のシールドエネルギーは大きな変化がない。
これにはセシリアも頭を悩ませた。

そもそもＩＳは、シールドを装備する必要自体がない。
シールドバリアーが展開してあり、機体を守るからだ。
シールドバリアーはシールドエネルギーを消費するが敵の攻撃を完全に遮断する。
このエネルギーがなくなると敗北するためにエネルギー残量には気をつかなければならないが、無敵の盾を基本装備としながらさらに防御力を高めるというのは難しい。
”シールドエネルギーを消費せずに敵の攻撃を阻害する”
それがＩＳにおけるシールドの存在意義である。
しかしこれもまた実用するとなると問題が多い。
実弾兵器やビーム兵器を防げるほどのシールドとなると、それなりの厚みになるだろう。
そうなると、どうしても量子化した際のデータ容量が大きくなってしまうのだ。
さらに機体の重量も上がってしまうだろう。

中途半端なシールドは機動力を下げるだけになりかねない。
その上、シールドは一回、一回の戦闘で融解してしまうために修理に資金がかかる。
毎度、毎度修理しようものならば、そのコストは馬鹿にならない。
以上の問題点からシールドを装備する機体は珍しい。

徹も無論その大きな問題点たちを理解していた。
確かにシールドなど、強固にしたところで実弾兵器なら数発・・・・ビーム兵器ともあれば一発しか防げないし、コストもかかる効率の悪い兵器だ。
倉田さんにもシールドはあまり破壊されないでくれと念を押されている。
（シールドは壊さないようにしていきたいが・・・・　シールド重量による機動力の低下があるから全弾回避ともいくまい・・・）
ではなぜあえて機動力を下げてまでシールドを持つことにしたか？
もちろんオリジナルの宇宙世紀のジェガンならシールドを装備しているからという理由も少なからずある。
だがそれだけの理由でシールドを装備しているのではない。”徹”のシールドに限っては対セシリア戦で絶大な効果を発揮するからだ。
現にセシリアのレーザーライフルは徹のシールドに数発ほど阻まれている。
このシールドにはある宇宙世紀性の技術が使用されていた。
”耐ビームコーティング”
徹のシールドにはその塗料が使用されている。
これはビーム兵器の防御策の一つである。ＩＳの装甲やシールドにこの塗料を「塗る」ことによって塗膜面に当たったビームの熱を塗膜の溶解によって吸収し無効化するものだ。
特殊なものではあるが所詮塗料なので安価であり、かつビームに対しての高い防御力を発揮する優れものだ。

これによりセシリアのビームをシールドエネルギーを消費することなく耐えることができている。
（クソッ・・・・ 思ったよりオルコットさんの射撃は正確だ・・・・ これじゃあいつまでもつかわからんぞ・・・・）
だが耐ビームコーティングはビームの熱を塗膜の溶解によって吸収し無効化するものなのだ。
一度ビームを受けた箇所は塗膜が融解し、剥がれ落ちている。
だから二度同じ箇所にビーム攻撃を食らえば攻撃を受けきることはできない。
徹も同じ場所にビームを食らわないように気をつけてはいるが、シールドにも限界はあるのだ。
（感覚はいまだ完全に一致していない・・・・・。あわよくば攻撃を回避している時に隙でも見つけられればと思っていたんだけどな・・・・）
徹が防戦に徹していたのには感覚を身体になじませる目的もあったが、攻撃の際に生じる隙を見つけることも目的だった。
動きながらでは当てることはできないが、一度足を止めれば正確な一撃を叩き込める。
その場で一瞬静止できるくらいの小さな隙を探っていたのだ。
しかし相手は代表候補生。小さな隙すらも見つからない。
隙を探る防戦の徹と、攻勢のセシリアで戦いは膠着状態になりつつあると思われた。

だがその均衡は破られる。
「ッ・・・・・・ ビットか・・・・・」
爆散するシールド。均衡を破ったのはセシリアによるＢＴ兵器を利用したオールレンジ攻撃だった。
避けきれずに想定外のタイミングでのシールドの使用を余儀無くされ、破壊されてしまった。
「わたくし相手にここまで耐えた人物など、女性にすらほとんどいませんでした。

……　たしかに男性にもマシな人間はいるようですね。
考え方を改める必要を感じます。
……　だから降参なさいな？
盾を失ったあなたにもはや勝機はない。これ以上の戦いに意味などありません」
セシリアは本気で男性に対する認識を改めようと思っていた。
徹は一見、防戦一方でありながら常にこちらの隙を狙っていた。
そのことが分かるセシリアは戦いの早い段階で慢心を捨てざるをえなかった。
”隙を見せたら食われる”
あまり味わうことのなきこの感覚は、セシリアにとっても貴重な経験だった。
ゆえにとどめまではさしたくなかったのだ。

「……　再開してくれ、勝負を。
俺はまだ負けちゃいない」
それでも徹はまだ諦めていなかった。その目にはたしかに光が宿り、闘志に満ちていた。
「残念ですわ……　ブルーティアーズッ！」
その返事を皮切りに、再び四基のビットによる波状攻撃が再開される。
（きたっ！やるならここしかないッ！）
「瞬時加速（イグニッションブースト）ッ！」
ここで徹は始めてセシリアの懐へと切り込む。
腰のハッチからビームサーベルを取り出し、装備する。
被弾を恐れない最短距離の接近。
徹はシールドを犠牲にやっと、隙を見つけた。
セシリアはビットを使用している際は、ビットの操作に集中するためにそれ以外の攻撃ができないようなのだ。
シールド破壊直後にレーザーライフルによる追撃がなかったことがそれを証明していた。

ビームライフルではシールドエネルギーを削りきることはできない。
その隙をつくならば接近戦だ。
接近戦ならばただでさえ強力なビーム兵器を近接武器とした”ビームサーベル”に勝る兵器はない。
「瞬時加速ッ⁉？・・・・ やらせませんわッ！インターセプターッ！」
まったく予想していなかったＩＳ初心者であるはずの徹の繰り出す瞬時加速。その速度はセシリアの予想していた動き全てを凌駕していた。
もはや距離を離すことは難しい。
（ならばここで迎え撃ちますわッ）
セシリアはビットの操作を放棄し、ショートブレードを呼び出す。
「遅いッ！」
セシリアが武器を展開し終えたときには徹はもうブルー・ティアーズの懐深くまで潜り込んでいた。
そのまま素早く一閃。
振り抜いたビームサーベルはセシリアのシールドエネルギーを大きく削った。
徹は自らの勝利を確信した。
ここまで接近すれば自分に敗北はない。
そう思った。

「・・・・・・・・ こちらにも奥の手はありましてよ」
ゆえに気づくことができなかった。
超至近距離で放たれたブルーティアーズのミサイルに・・・・・
激しい爆風と爆発は、お互いの機体を巻きこんだ。
その後、両者のシールドエネルギーが共に”０”になったことを表すブザーがアリーナ内に鳴り響いた。

◇

千冬ｓｉｄｅ
～試合開始直後～

「あの？織斑先生？」

……　本当に徹くんはＩＳ操縦時間は数時間なんでしょうか？」

「そのはず……　なのだがな……」

正直に言って、あの操縦技術が一昼一夜で身につくものとは思えなかった。

……　特に恐ろしいのは回避技術だ。

セシリアの猛攻を最低限のシールドの使用で回避していた。

（ＩＳ操縦初心者特有の動きのぎこちなさはたしかにある。なのになんだというのだ……　まるでどこに攻撃がくるかが分かっているような回避は？）

その動きは相手の動きを見ているというより”分かっている”ようであった。

そんなことはＩＳを乗りこなした熟練者でも難しい。

（！……　まさかあれは）

そして徹は驚くことに瞬時加速を使用したのだ。

瞬時加速使用後に起こりやすい立ちくらみのような現象もまったく感じさせなかった。

（天賦の才……　その一言で片付けるにはあまりにも強大な力だ……）

いったい空白の１０年間。徹に何があったというのだろう。

（転生した……　あの話は本当なのか？）

自分の知る徹が何か別の人物のように感じ、ゾッとした。

◇

アリーナの待機室にて徹を待っていたのは一夏だった。
「凄い！凄いぜ徹！
かっこよかった！いやー興奮したよ。ビデオカメラもってきとけばよかった……」
一次移行中にビデオカメラを構える気だったのだろうか？
とにかく一夏は興奮していた。
専用機ｖｓ専用機の戦いなどそう簡単に見られるものではない。
ＩＳが大好きな一夏にとっては最高のプレゼントだった。
「うん……　引き分けだったけどね……　最後の油断がなければ……」
アノバメンデハフミキラズニハンポホドノヨユウヲ……
あのミサイルの回避は可能だった。
あの慢心がなければ勝利できていたかもしれないと思うと今、この瞬間も悔しい。
「セシリアさんのＩＳのエネルギーが補充完了次第、一夏くんとオルコットさんの模擬戦だってさ」
「なんか緊張してきた」
さて……　と。
徹は、これからさっそく壊したシールドのことを倉田に報告する仕事ができていた。
「憂鬱だ……」

第九話

「おーい！徹～！次は俺とお前の模擬戦なんだから準備してくれよ～！」

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナ・・・・・ハッ！一夏くん、試合は終わったのか？」

一夏ｖｓセシリアはセシリアが勝利を収めた。

一夏のＩＳの白式は、どんな状況下でも一発逆転を狙えほどの強力な武器”雪片弐型”を装備している。

白式が使う単一仕様能力の”零落白夜　（れいらくびゃくや）”は、発動時に自分のシールドエネルギーを消費しながら、敵のシールドバリアー無効化攻撃を放ついわゆる諸刃の剣である。

持ち前のセンスが半年の訓練で磨き上げられたためだろうか？

一夏は、セシリアの強力な攻撃の嵐をある程度回避することができていた。

単一能力を使用しながら、セシリアへと接近。シールドバリアー無効化攻撃を叩き込もうとする。

だが、シールドエネルギーが削られ過ぎていた。

セシリアの懐に入り込むことに成功したときにはシールドエネルギーの値は”０”を告げた。

その後、試合を終えた一夏が待機室にてパソコンに懺悔する徹の姿を発見し、今に至る。

「ふーん、オルコットさんが勝ったのか？」

「いや・・・・言い訳したくはないけどさ・・・・あのセシリアに対して武装が剣一本はさすがにおかしい」

話を聞くに一夏もセシリアの懐に入り込んだようだ。

（オルコットさんの懐に剣一本で潜り込むなんて……　一夏くんは末恐ろしい少年だな……）
中学時代に、護身用にと軍式の体術を仕込んでいた時も感じた。
一夏には大きな才能がある。
大きな才能を持つ者の中には、その才能に溺れ、驕り高ぶった態度をとる者も少なくない。
だが一夏は、その才能を鼻にかけるような真似はせずに、こちらの指導することに対し、実に素直だった。
そういう人間は伸びる。実際、一夏は半年で代表候補生に迫るほどの実力を得ている。
「ん……　一夏くん、そろそろ試合開始時間だし……　俺は向こうの待機室に行くよ。楽しい戦いにしようぜ」
徹が関われなかった半年間。その間にどれだけ一夏は成長したのか。
「二連敗は嫌だからな……　覚悟しとけよッ！」

◇

代表候補選抜戦を終えた徹は自室にて、倉田への戦闘データの報告をしていた。
世界初の技術を大量に搭載したジェガンの実戦データにはそれなりの価値がある。
今日の模擬戦は反省点も多かったが、かなりＩＳの感覚に馴染むことができた。
（今日実際に戦闘してみて、感覚のズレがどの程度が認識できた。
あとはコレを修正していくだけだな……）
徹にとって得るものも多かったわけだし、今日の模擬戦は充分に有意義と言えるだろう。

「倉田さん、戦闘データそちらへ送信しますよ。一勝一分けでした。
……シールド修理は急がなくて結構です。ハイ」
一勝一分け……それは徹が一夏に勝ったことを表していた。
……半年たっても一夏は一夏だった。
一夏の動きの本質は中学時代とたいして変わっていない。
動き方が素直すぎる。ようするに単純な攻撃しか仕掛けてこない。
単純な攻撃だろうと極めていけば、そこには鋭さが生じ、自分の切り札へと昇華することもあるだろう。
だから一概に単純な動きが悪いとはいわないが、一夏の攻撃はまだ切り札といわれるような域まで達していなかった。
単純な攻撃はいとも簡単に読み取られてしまう。

徹にとって、敵の動きを読むことは得意分野といえる。
それは前世の戦闘での経験によるところが大きい。
ＭＳの戦いにおいて生き残るために制さねばならないことは”動きの読み合い”だ。
敵がどう動くのか？戦場では常に二手、三手先を読む能力が求められる。戦闘経験により磨きあげられた感性。その感性で危機を察知することが大切だ。
一度のミスは死に直結している。
動きの読み合いを見誤ったら簡単に人の命など散る。
ゆえにＭＳ同士での戦闘では全弾回避が理想だ。ビームライフルがかすっただけでも場所によってはそれが致命傷になりうるので細心の注意をしながら回避する。
この前世の経験からくる徹の動きを予測する力は、ＩＳに搭乗する今世で身につけることは難しい。
ＩＳにおける戦いでは回避はＭＳの戦いほど重要ではない。
シールドバリアーの存在があるからだ。
もちろん攻撃を回避しなければシールドエネルギーが消え、敗北するため回避は重要だ。
しかしそこにはＭＳ戦における回避のような切迫した命のやりと

りなど確認しようもない。
命の危機を常に感じていた戦場では、危機察知能力の成長がとてつもなく早かった。常に危険と隣り合わせなので、自然と危険の”匂い”を感じとれるようになるからなのかもしれない。
そのように死の匂いを感じ取ることは、シールドバリアーがある限りは難しい。
それゆえこの敵の動きを予測する危機察知能力の最終形、”戦場での勘”とも言われる能力は徹だけの特別な力といえるのだろう。

つまり動きを読むことに特化した徹に対して、単調だが強力な攻撃で勝負をかける一夏は相性が悪かった。
結局、一夏が二連敗する結果となった。

「ん‥‥ シールドが壊れたと聞いたときは柄にもなく怒ってしまいましたが、そんなにかしこまらなくても結構ですよ‥‥
幸い確認してみたところ、シールドに関しては予備がありましたし。
量子化して拡張領域の方に入れておきます‥‥ 予備まで壊さないでくださいね徹博士」
「あ、ハイ‥‥ 善処いたします」
それと博士呼びは完全に定着している。
「実は‥‥ 今日はいいお知らせが二つほどあるんですよ」
倉田さんはもう怒ってないみたいだった。‥‥ 良かった。
むしろお知らせの話をしようとしてから珍しく気分が高揚しているようだ。
‥‥‥ 何があったんだろう?
「まずひとつはスタークジェガンへの換装装備が完成したことです。
ジェガンが一次移行で追加装備を装着するのに適した形態に変化したものですから換装装備の製作の手間が大分省けました。
装備実装のため今日から五日後にジェガンを引き取らせていただきますね」

ジェガンがＤ型へと一次移行で変化したことは思いがけない幸運だったのかもしれない。
本来ならマウントハッチの製作はジェガンの一次移行した姿に合わせて設計する予定だったのだ。そのため完成予定は完全に未定だった。
だが変化したジェガンは様々な追加装備を換装可能なマウントハッチを装着したジェガンＤ型だった。
だが五日後と言うとクラス代表戦が近くに控えている。
（別に代表候補生になりたいわけでは断じてないがそこは知っておかねばならないだろう。
だ、代表候補生になりたいわけではないが！）
誰に伝えるわけでもない言い訳だ。
「あの……スタークジェガンへの換装にはどれくらいの時間を有するんですか？」
「……なにかそちらでＩＳを使用する機会があるのですか？
少なく見積もって三日といったところなので都合が合わないならばジェガンの換装は先送りにしますよ？」
徹は思ったことが顔に出やすい。倉田は徹が少し換装をためらっていることに気づいた。
このままだと仮に代表になったとしても愛機での出場ができない……そのことに徹は少しショックを受けていた。
……だが背に腹は変えられない。いち早く前世における最後の相棒と再開するためには、そんなこと程度で改修を先送りにはできない。
「……いや、問題はないです。
五日後にそちらにジェガンを送りますのでよろしくお願いします」
「わかりました。責任をもって最高の機体に仕上げさせていただきますよ。任せてくださいね！」
ただ愛機の使用ができないことは代表候補戦を望んでいた徹の熱意を一気に冷ました。
（なんだかなぁ……ジェガンが使えないならクラス代表は辞退しよ

うかねぇ・・・・）
倉田から続けて語られたもうひとつの報告はジェガンではなくＪＥＧＡＮのことであった。
「私たちジェガンプロジェクトメンバーは、ＪＥＧＡＮの量産体制の確立を実現する実案を世界で初めて完成させたんです」
「この功績により、私たちは国際ＩＳ委員会管理下の世界企業として起業することを認められました」

ＪＥＧＡＮの量産体制の確立。これは徹自身が密かに望んでいたことだ。
この世界の人間はＩＳを兵器だと認識していない。スポーツの道具程度に思っている人も少なくはないだろう。
徹は別に皆がＩＳを兵器だと認識できていないことはしょうがないだろうなと思う。
実際”絶対防御”などという代物があるのだから、前世のＭＳのように殺しあいにしか使えないものではないのだ。
搭乗者の安全が完全に保証されている兵器ならば、もはやそれは兵器ではないのかも知れない。
徹にとって兵器であるなしを判断する基準は人命を奪いさるか否かが最も大きなものだ。
だから相手の命を奪う心配がないなら兵器とは呼ぶこともないだろうと思う。
だがＩＳは兵器としての一面を少なからず持っている。
絶対防御が全ての攻撃を無限に受け止め続ければあるいはＩＳは兵器とは呼ばないかも知れない。
・・・・だが、そんなことは不可能だ。
ＩＳの攻撃たちを何の力も消費せずに防げるわけはないのだ。
絶対防御発動にもエネルギーは消費する。
発動後に受け止める攻撃の威力の大小でエネルギー消費の量は変わる。
発動後に強力な攻撃を何度か叩き込めば、絶対防御とて耐えること

はできないだろう。
つまり絶対防御の発動下で追撃を加えるようなことがあれば搭乗者の命を奪うことができるのだ。
この点において間違いなくＩＳは兵器なのである。
もちろんそんなことはスポーツとしてＩＳを使用する分には起こりえない。
だからこそ人々がＩＳを兵器として見て非難することが今日までなかったのだ。
徹が恐れるのは、ＩＳを”兵器と認識せざるを得ない出来事”が起こることである。
だがＩＳが兵器だと認識されてしまうきっかけを生みかねない火種は存在している。
４６７個・・・　いや現在は４６８個となったコア。そのほとんどは国際ＩＳ委員会に所属する各国で管理されている。
だが全てのコアが管理されているわけではない。
所在が不明となってしまっているコアも存在しているのだ。
各国に運搬されている最中に行方の知れなくなったものや、テロ行為により各国で研究中に奪われたコアなどが主に当たる。
・・・・・　各国は自国のプライドを守るために奪われた事実をひた隠しにしていることが多いため所在の知れぬコアの正確な数の把握は不可能だろう。
こうして奪取されたコア及びそれを使用したＩＳがテロ行為に利用された実例がある。
それに対抗する戦力として軍事用ＩＳなるものも、民衆の知らぬところで作り上げられた。
（ＩＳが兵器として利用されることがあれば・・・・　それを止める抑止力が必要だ。ＪＥＧＡＮをその抑止力にできれば・・・・）
ＩＳ以外を抑止力にできればそれがベストだが、ＩＳに対する抑止力たる兵器はＩＳしか存在しない。
（だからＩＳは好かんのだ・・・・　ＭＳならば戦車や戦闘機・・・・　それどころか歩兵の爆撃であっても落とせる。

だがシールドエネルギーがある限りはＩＳを落とすことはＩＳにしかできない）
ＪＥＧＡＮは抑止力としては不完全だ。今世を戦乱の世に変えないためにも、自分がもっと努力せねば・・・・ と徹は決意を固める。
「それに伴い、我が企業の社名を社長となるあなたに決めていただきたいのです。何かいい案はありますか？」
「しゃ・・・・ 社長ですか今度は・・・・
ハァ・・・・ 社名は考えておきますから待っていてください・・・・」

少し大きめのため息をつきながらＰＣの電源を落とす。
確かにいい知らせではあったが考えさせられる内容だった。
この世界を丸ごと変えるほどの力は自分にはない。
だから徹はこの世界の人々を信じたいと思った。
それぞれの国の人々にＪＥＧＡＮのデータを託したのには、そんな願いがこめられている。
各国の平和に貢献するための糧になることを機体して。
（ネオジオン抗戦の最後・・・・ 俺は人類の可能性を目の当たりにした。あの温かい光・・・・）
”コンコン”
思考を遮る扉をノックする音。
その音は来訪者の存在を示していた。
扉を開けノックをした人物を確認する。
「今日のことについて・・・・ 少しお話しさせていただけませんこと？」
自室への来訪者はセシリア・オルコットだった。

◇

鈴音ｓｉｄｅ

「やっと・・・・ やっと会えるのね・・・」
ＩＳ学園に一人の転校生が訪れようとしている。
名は凰　鈴音。彼女は二年前の時を経て想い人とその友に再開することとなる。

～過去・二年前、教室～
「ねぇ？徹？ひとつ聞いていい？
「もし再会したら――

ああああっ／／／／無理ッ！　やっぱなし！今はまだ待ってッ！」
妄想ではなんでもできても現実だとそうはいかない。
伝えたい思いに恥ずかしさが打ち勝ってしまい自分の本心を伝えることができなかった。
徹も目の前でいきなり声を荒げ涙目になる鈴の姿に困惑していた。
・・・・ なぜ涙目なんだろう？
そんなに自分に別れの挨拶をして欲しくはなかったのか？
このようなことを考えるほど徹は完全に斜め上をいくどうしようもない思考回路の持ち主だ。
とりあえず泣かれるのも困るので機嫌を直してもらうことにした。
「・・・・・ うーん。俺にできることならなんでもするよ？」

～回想終了～

「オレニアイニキテクレタンダネ？」

「むふふ……　やっぱりいい」
再生機から流れるのは編集された徹の声。
二年前に鈴が頼んだのは徹の五十音の録音だった。
徹本人は何故だかわからなかったが
自分でなんでもと言った手前断れなかった。
ましてや本人が土下座しかけてまで依頼してきたのだ。断れるわけもない。
手に入れた五十音は鈴の手により編集され様々な台詞に変貌した。
「この声が生で聞けるかと思うとテンション上がってくるわね…」
この羞恥心の使い所が完全におかしい少女はＩＳ学園で何を見るのであろうか……？

第十話

一夏ｓｉｄｅ

「・・・・ハッ・・・・・・ハッ・・・・・・」

一夏は走っていた。ＩＳ学園の広過ぎるくらいのグラウンドを。

一夏にとって夜のランニングは日課である。これは中学時代に自主的に始めたものだ。

徹の体術の指導では、まず前提として高い身体能力が必要だった。そのため一夏は身体を日頃から鍛えている。

そのひとつがこのランニングだ。

「・・・・・・フゥ・・・・・・さすがにＩＳを動かしたりするグラウンドだけはあって広いな・・・・」

一夏は今日の代表選抜戦で全敗した。悔しくてたまらなかった。二人と戦うことで己の無力を痛いほどに実感させられた。

（ここからだ・・・・ここがスタート地点だ）

どんな壁でも越えて大切なふたりの家族と肩を並べてみせる。改めて決意を固めた一夏は、にんじんが浮かぶ空を見上げた。

・・・・・・・・・・？

・・・・・・にんじん？

空ににんじんが浮かんでいた。いや、あれはだんだん大きくなっている。否、だんだん近づいている。

「あ、あのにんじんこっちに向かって来てるぞ！」

空から謎のにんじん型の落下物が降っている。

謎の落下物は勢いを少しずつ抑えながらも、一定の速度を保ちつつ落下を続け・・・・・・学生寮の部屋の壁に突き刺さった。

「・・・・・・・・あの部屋はたしか徹の部屋じゃ・・・・・・」

にんじんが刺さっているのは自分の部屋の隣あたりだ。
多分、徹の部屋ではないだろうか？
壁を破壊し、めり込んでいるにんじん。
一夏はともかく徹の安否を確認せねばと思い、ランニングを中断し学生寮へと駆け出した。

にんじんの衝突音でパニックになっている女子達を掻き分けながら徹の部屋に向かう。
いつもなら鍵をかけている徹の部屋の扉はセシリアを招き入れたあとなので空いていた。
扉を開けたその先で一夏が見たのは、壁に大きな穴が空いた、瓦礫だらけの部屋とぽかんとした表情で立ち尽くすセシリアの姿だった。
そこに徹の姿はなかった。

時は一夏が徹の部屋を訪れる少し前へ遡る。
「「……。」」
徹の部屋である１０２６号室にセシリアが訪れてから既に十数分は経過しただろうか。
１０２６号室は沈黙に包まれている。
徹がセシリアをとりあえず部屋に招き入れたはいいが、セシリアはそれきり口を閉ざしているからだ。
『今日のことについて……　少しお話しさせていただけませんこと？』
今日のこと……　それはおそらく今日の模擬戦についてのことだろう。
模擬戦の代表選出はまだ終わってはいない。
おそらく引き分けた自分たちのどちらかが代表になる流れになのが普通なのだろう。
だから徹とセシリアのどちらが代表になるか。それを話し合いに来たのだと思う。

しかし、徹はクラス代表になるつもりにはなれなかった。
先ほど代表戦ではジェガンが使用できないことを、知ってしまったからである。
（クラス代表戦に出場する気はこちらにはないんだよなぁ……）
だからクラス代表は辞退する予定だ。その話であればその意思を伝えなくては。
なんにせよちょっとお話しいいですか？と、聞いてきたのは相手なのでセシリアの言葉を待つことにした。
それから十数分後にきたものは待ってもいない来訪者だったのだが。

壁を突き破って突入してきたにんじんから出てきたのはうさ耳をつけた篠ノ之　束であった。
「な……　あなたは束博士！行方不明のハズのあなたがなぜここに？」
徹は突然の来訪者に思わず声を大きくする。
セシリアも驚きの声をあげる。
もちろん徹は束を知っている。ＩＳを少しでも知る人間ならば束を知らぬ人間などいないだろう。
だが直接会うのは初めてだ。
「あり？予告はしてたよね？とーくんとお話しにきたんだよー♪」
「え？……　いやいやこれは突然すぎませんか？
せめて壁を壊すとかなく会いにきてくれれば……　ウッ」
「場所を変えるよとーくん。ここであまりうるさくするとちーちゃんに怒られちゃうからね」
セシリアが見たのは手刀で意識を失った徹がにんじんで連れ去られる姿であった。
あまりの出来事に着いていけず置いてけぼりにされていたセシリアはなにがなんだか分からずに立ち尽くすしかなかった。
セシリアが正気を取り戻すのは数分後に一夏が訪れた後のことだった。

◇

宇宙世紀００９３年。
難民用コロニーのスウィートウォーターでのネオ・ジオン軍による宣戦布告から始まった戦いは終わりを告げようとしていた。
ルナツーにて和平交渉が行われることになったのだ。
地球連邦軍の戦力がネオ・ジオン軍のそれより圧倒的だったためジオン軍の停戦の要求は至極当然のことで、そこに疑いを持つ人物はいなかった。
（くそ・・・・ なんだこの嫌な頭痛は・・・ 戦いは終わるんだぞ？）
謎の頭痛の訪れは嫌な知らせを連れてきた。
「ルナツーが占領されただって？」
連邦軍の宇宙基地、ルナツーがジオン軍に占領されたという知らせだ。
その知らせを受け、連邦軍は混乱の渦に包まれた。
連邦軍とジオン軍では圧倒的戦力差が存在しているのだ。
この交渉の機会を逃すことなど誰が予想しただろうか？
ましてやジオン軍の狙いが〝小惑星アクシズを地球に落とすこと〟などと誰も予想できたはずもない。
アクシズの地球への落下の阻止はもはや不可能であると思われた。
地球はアクシズ落下と地表付近での核爆発による核の冬で人が住めない場所となるだろう。
まんまと連邦軍はジオン軍にしてやられたのだ。
《こちら地球連邦軍外郭部隊ロンド・ベルである。我が艦はこれよりアクシズの落下の阻止に向かう。可能な限りの支援を願う》
・・・・・・ いやひとつだけジオンに対抗する戦力が存在した。
ロンド・ベル隊を中心とした勢力だ。
連邦軍のルナツーの指令系統が壊滅状態にある中、その時、周辺空

域の警戒に当たっていた徹たちも独断でロンド・ベル隊の支援に向かった。
（まだ希望は潰えていない・・・・　光を――――

◇

――――ッ・・・・　そうか・・・・　夢か・・・・　頭を走った鈍い痛みで目を覚ます。
（アクシズショックの直前か・・・・　また懐かしい夢を見たものだな）
（・・・・　それにしてもここはどこだ？見知らぬ天井だが）
　徹はベッドの上で寝かされていた。
・・・・・　どうやら気絶していたらしい。
　身体を起こし辺りを見渡す。見覚えがない部屋で人影はない。
（身体は拘束されていないな・・・・　いまいち状況が把握できん）
　徹が頭を悩ませていると部屋に人が入ってきた。
「お！目が覚めたんだねとーくん♪さぁさぁ束さんとお話しようよ」
・・・・・・　そうだ。思いだした。自分はこの目の前の人物に・・・・・
「手刀ではじめましてとは随分前衛的な挨拶ですね・・・・　できれば遠慮願いたかったですよ」
　入学初日に肩にグーパンを入れてきた家族を連想する。
　徹は知らないことではあるが目の前の束と千冬は、歪な関係ではあるが親友である。
　何かしら似通った性質があるのかもしれない。
「いや～君が・・・・・　なんだっけ？たしかじぇがん？だかを開発したのを見た時はびっくりしたよっ」
「まさか私の思考の及ばない領域を私以外が発見するなんて驚きだよっ」
「特にミノフスキー粒子！あれは――――

徹の皮肉混じりの言葉は完全にスルーされたらしい。
束は興奮しつつ徹の技術を賛美しながらその技術に対する自分の解釈を伝えていく。
驚くことに目の前の人物は、この世界に初めてもたらされた宇宙世紀産の技術を独力で理解したようだ。
展開されていく理論の数々は、専門用語こそ使われていないものの徹の記憶している知識と一致したものだった。
「……で、俺を誘拐した目的はなんです？話ってのはそれだけじゃないですよね？」
「……察しのいい子は嫌いじゃないよ。束さんが聞きたいのはこの技術はどこのものかだよ？」
驚いた。まさか前世の存在に気づきつつあるのか？
徹が束と対峙して感じたものはこのＩＳの開発者の人間離れした性能であった。
そもそも大きな軍事技術の発展には戦争が必要不可欠である。
宇宙世紀においてＭＳがあれほどの速度で強化・発展してきたのはそれが必要だったからだ。
生きるために必要だからこそ、皆死に物狂いで産み出した、産みだせた技術なのである。
必要に迫られたわけでもないこの平和な社会でどうしてＩＳなど生み出せたのだろうか？
また身体能力のスペックも常人をはるかに上回っている。いくら不意をつかれたといえども、軍人である徹を手刀で気絶させるなど本来不可能に近い。
色んな面において束はオーバースペックだった。
「いや……なんの話でしょう？」
少しとぼけてみる。すると束は口角がつり上がり笑うような表情になった。得意気な口調になりながら話を続ける。
「最初はとーくんも私と同じく違う生き物なのかなーって思ったんだ……でも君は違った」
「とーくんは確かにそこらの凡人とは異なるけど……それでも私と

は違ったんだよっ！さっすがの束さんだよねっ！私は歴史上ナンバーワンの科学者を自負してるんだよっ」
徹は束の表情が一瞬暗くなったような気がしたがすぐに先の口調に戻るのを見て気のせいと思うことにした。
その裏にある空虚な強がりにも目を逸らさなければ気づけたハズなのに。
「君がちーちゃんの前に突然現れたあの日・・・・ その場所では過去に類を見ないほどの時空の歪みが観測されたんだよ」
「束さんはテレポーテーションの類いだと結論づけてたんだけどね」
「君が数々の技術を発表してしばらくして気づいた。君は私の同類じゃなくて別世界の人間なんじゃないかってさ？」
・・・・・ 全て正解だ。ここまで来ると恐ろしさすら感じる。
「ッ・・・・・・ へー面白い推測ですが、証拠はあるんですか？」
ある筈もない。証拠がないならば認めなければいいのだ。
そうすれば真実はうやむやになる。
だがその言葉を待っていたと言わんばかりに束は嬉しそうな表情を見せる。
「プルシリーズ・・・・ 強化人間って知ってるかな？」
「・・・・・・・・・ どこでそれを？」
・・・・・・ あり得ない。プルシリーズの存在は徹も知っている。
第一次ネオ・ジオン抗戦の負の産物、クローンニュータイプの少女だちだ。
彼女らは人工子宮において育成され、発生の初期段階から肉体的な強化措置を施されている強化人間である。
単純に能力のみを求められ、作られた人間たち。
問題は、徹はこの知識をこの世界で明かしてはいないことである。
なぜ目の前の人物は知っている？
「どこで・・・・・ 本人から聞いたって言ってみたらどうする？」
「俺はそんな知識を言いふらした覚えはないんですがね」
「違うよ・・・・・ 本人ってのは・・・・ プルシリーズの女性本人にって話だよっ」

馬鹿な・・・・ それこそあり得ない。プルシリーズは徹の世界のものなのだ。
もし仮に徹と同じようにこの世界へ現れたにしてもおかしい。
プルシリーズは第一次ネオ・ジオン抗戦にて全て葬りさられたと聞いていたからだ。
・・・・・ 世界線だけでなく時間線まで超えているのか？
「まあ本人に直接聞いたというと語弊が生じるけどね・・・・・ 正確には本人に刻まれていたＤＡＴＡに全ては記してあった」
「半年と少し前・・・・ 正確には２４３日と１４時間２７分前に新たな時空の歪みが観測されたんだよ」
「とーくんの時と同じ現象だからびっくりしちゃったよっ」
束は幼い少女のようにコロコロと表情を変える。
その表情はまたしても一転し、暗い表情へと切り替わる。
「私はそこで彼女・・・・ プル・トゥエルブを保護した」
「彼女の名前を知るだけでも苦労したよ・・・・ 強力かつ強固なプログラムで守られていたからね」
「記憶を自由に改竄されている人間・・・・ 彼女が何者かは私にも分からない」
「ただ彼女は女性としての機能を失っていたよ。身体のスペックは強制的に上げられているしね・・・・・」
「今だに彼女は目を覚ましていない・・・・ とーくん？君の世界ではこんな横暴がまかり通っていたのかい？」
徹はもはや自分が異世界人であること、自分の前世の存在を隠すことは不可能だと悟った。
だから束の質問にキチンと応じることにした。
「わからない・・・・ わからないことだらけだ。プルシリーズや強化人間は俺の敵の技術でしたから・・・・ 知ろうともしてませんでした」
束の目には深い悲しみが宿っていた。徹も目を背けていた者を直視させられた気分だった。
「・・・・・・ それでも君の世界の技術なんだね・・・」
「ハイ・・・・ 認めます。俺は異世界人でプルシリーズは俺の世界の技

術です」
　束は納得したように小さく何度か頷いた。
「……よかったよ。君がいなかったら彼女は真の意味で孤独になっちゃうからね。今の話を聞くと仲良しこよししていた相手じゃなさそうだけれど……目を覚ましたら仲良くしてあげてくれないかな？」
　徹はそれを了承した。プルシリーズの少女たちに罪を被せたのは自分の世界の大人たちで、彼女たちに罪はない。
　せめてこの世界では幸せに過ごして欲しい。
「そうですね……俺の世界の事情も全て説明します。他言無用でお願いしますよ……」
　それと、徹は目の前のおかしな科学者を少しだけ信じてみることにした。

「これがプル・トゥエルブだよ、とーくん」
　最後に顔くらいはチラッと見せてもらうと思いいたった。
　目の前にいたのは少女は自分の想像よりも少し大きかった。
　そこにいたのは２０歳にいくかいかないかの女性だった。
（そうか……時間線は俺と同じなのかもしれない。プルシリーズは全滅していなかったんだな……この歳まで……一体どんな経験を背負って成長してきたんだろうか？）
　その答えは彼女が目を覚ました時に聞けるだろう。
　徹は束からの知らせを待つことにして束のラボを後にした。

……にんじんのロケットで。

◇

side???

「男性に対してあんなに心が高まったのは初めてでした」
「その原因を確かめにわざわざお部屋まで行ってみましたのに……」
「そうですわ！今は情報社会。インターネットで男性について調べてみることにしましょう」
「ん？BL？
……なんですのコレは？」カチッ

「……／／／／」カチッカチッ

「／／／／／」カチッカチカチカチカチカチカチカチカチ

第十一話

「全治一週間です。一週間の間は激しい運動は控えるようにお願いします」

徹は頭の中で

（どうしてこうなった・・・）

とつぶやく。

にんじんロケットにはブレーキが備わっていなかったためにロケットの推進力をうまく調整できず凄い勢いで地面に突き刺さった。

これでも多少は身体を痛めた。しかしこれは全治一週間の原因ではない。

問題はその後だ。徹帰還の話を聞きつけた千冬と一夏が感極まって全力で抱きついてきたのだ。

そう。

世界最強のブリュンヒルデが全力で。

徹の腰の骨は高い音を立ててお亡くなりになった。

余談だが涙目で謝罪する千冬の姿は、たまたま再開の場に居会わせた周りの女子たちが鼻血を我慢できないほどの破壊力だったとかなんとか。

◇

腰の治療のために訪れた保健室にて、束と会ってきたことを説明すると、千冬は束と腐れ縁であることを明かした。

徹は大体予想はついてはいたが、ところどころ束の会話に出てきたちーちゃんは千冬のことなんだなと確認できた。

『あの馬鹿め・・・　相変わらず突拍子もなくわけの分からぬこと

を…』

と悪態をつきながらも、千冬は、穏やかで見ているこっちが微笑ましく感じるような表情を浮かべていた。

その表情から、徹はふたりの関係をある程度察することができた。

『ダガ…… コノオトシマエハツケサセテモラウゾ』ゴゴゴゴゴ

その少し後には鬼神が降臨していたが、徹は既にその場にはいなかった。

保健室を後にした徹は、痛む腰を押さえながら、自らに再び当てられた部屋に向かっている。

現在、徹の部屋は大穴と瓦礫の山でとても人が寝泊まりできる場所ではない。

そこで急遽、修理が済むまでの一週間の間は二人用の客室を使うことになったのだ。

千冬によると、その部屋には急に転校してきたために部屋割りがまだ決まっておらず仮の部屋としてここを使う人も後から来るとか。

ひとりで過ごすのも寂しいが見知らぬ人と過ごすのは気まずいなと思う徹だった。

見知らぬ女性と過ごすことになる際に、男子たちが考えるであろう妄想をほとんどしない辺りは流石と言えるだろう。

「…… あ、そういえばオルコットさんとの話は結局流れちゃったんだよな…… 悪いことしたなぁ……」

新しい部屋にて、一息ついたあとに、徹はセシリアとの話が結局まともにできていないことを思い出した。

「せっかく部屋に部屋番号で連絡が取れる電話があるんだし…… 千冬さんに番号聞いて連絡とるか……」

徹たちが暮らす寮には一部屋にひとつ固定電話が設置されている。

この電話では普通の携帯などに電話をかけることができる上に、部

屋番号で誰かの部屋に電話をかけることもできる便利なものだ。

「あーもしもし、織斑　徹ですが」

『・・・・・・・・　え！セ、セシリア・オルコットですが・・・・　な、何の御用でして？』

「昨日せっかく俺の部屋まで来てもらったのにまともに話せなかったことを謝罪したかったんですが・・・・　今お時間よろしいですか？」

『も、も、もちろんですわ』

・・・・　何だろう？オルコットさんは凄い焦ってるみたいだ。

時間はあるみたいだし不都合なことはなさそうだけどなぁ・・・　と徹は思っていた。

実はこの時に、セシリアはネット上で、自分の新たな趣味の世界に没頭していたために動揺したのである。

昨日、自分の気持ちの確認もろくに済まぬままに新たな知識を得てしまったことで、芽生えかけた恋心が明後日の方向に旅立ってしまった・・・・　という事態が起こっていた。

その結果、セシリアはＢＬ好きの健全な腐女子になったりしているのだが・・・・　徹には知るよしもないことだ。

『徹さんは・・・・　クラス代表を辞退するんですか？』

徹は自分にクラス代表になる意思は無いことを告げた。

愛機が使えなくてやる気が削がれたなどという理由で辞退していたら千冬に何をさせられるか・・・・・　それだけは唯一懸念していたのだが、予想外の怪我でクラス代表の辞退の理由は自然にできた。

「まぁ・・・・　俺はＩＳがあまり好きじゃないですからね・・・・　怪我がなくてもどちらにせよ辞退していたとは思うよ」

追加でＩＳ嫌いという一言を付け加えたあといくつか言葉を交わし、電話を終えた。

◇

一夏ｓｉｄｅ

「「一夏くんクラス代表おめでとう～‼？」」

「で・・・・ なんで俺がクラス代表なんだ？」

一夏は全敗したのにも関わらずクラス代表になっていた。

クラスの皆は一夏のために、一夏の代表就任パーティーを実行していた。

「それはわたくしがクラス代表を辞退したからですわ」

受け答えたのはセシリア。例のごとくなぜか得意げな表情だ。

「思い返せば一夏さんと徹さんをクラス代表に望む声はたくさんありましたわ」

「実力がそぐわぬならば認めるわけにはいきませんでしたが、実際戦ってみて、お二人の実力ならクラス代表をお任せて何の問題もないと思い至りましたの」

「ですから今回は周囲の皆さんの意思を尊重させていただくことにしましたわ」

それを聞き、周りの女子たちが騒ぎだす。

「いやーセシリアわかってるよねー」

「そうだよねーせっかく男子がいるんだからねー」

ええい！冗談ではないッ！

だが周りの女子の笑顔の包囲網を見るともう逃げ場はないように思えた

。

・・・・ いや、待てよ？

「それなら俺に勝った徹をクラス代表にすべきだろ？」

何故こうならないのか？先の代表選抜戦にまったく意味がなくなってしまうだろうと思う。

「一夏君・・・・ 俺は怪我人なんだぞ？対抗戦の参加は厳しいな。

クラス代表始まって最初の仕事すら代理に任せるようじゃ話にな

らないだろ？」
「ｏｒｚ……」
これはどう足掻いても一夏がクラス代表になるのは避けられないようだった。

「かぐらーん！こっちきてよー」
「……もしかしてカグランって俺のことですか？」
「そうだよー。かぐらんと仲良くなりたいなーと思って声をかけてみたんだ」
「カグッ……なんでカグランなんですか？」アセタラタラ
「えー？んーそれは―

―

徹はのほほんとした少女に呼ばれてどこかに行ってしまった。
……徹にしては珍しく本気で焦っているように見えるけど何があったのだろうか？

「随分と人気者だな一夏」
徹が離れたタイミングを見計らったのだろうか？箒が入れ違いで近づいてきた。
そういえば徹と箒が話している姿は見たことがないな、と思った。
「そう思うか？」
クラス代表については正直に言えば面倒な仕事を押し付けられたようにしか感じない。
対抗戦でのＩＳでの実戦に魅力を感じないと言えば嘘になるが、クラスの室長も兼任するとなると別問題だ。
とても自分に務まるとは思えない。

箒はなぜかフンッとそっぽを向いてしまう。
（何だろ……　今の会話には何も問題ないだろ？）
先の箒の皮肉すら皮肉だと気づけていない一夏では、箒の真意を察することはとうていできそうもない。
まあこれに関しては自分の意思の伝え方があまりにも不器用すぎる箒にも問題はあるのだが。
〝パシャッ〟
「ハーイ新聞部でーす」
「クラス代表には織む……　あーえっと一夏くんがなったんだよね？　おめでとう」
「ん……　あぁ……　そういうことになってます」
「あ！自己紹介が遅れたね？私は２年の黛　薫子です。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。
新聞部とカメラで察しはついてるとは思うけど……　君のことを取材しに来たんだ。ちょっと写真いいかな？」
「写真……　ですか？」
「そうそう写真、写真。なんせ注目の専用機持ちだからねー」
専用機を一年生のうちに既に所持している生徒は珍しく、注目されるらしい。
ましてや今年は専用機持ちが例年より多い上にそのうちふたりは世界初の男性操縦者なのだから取材がくるのは当たり前とも言えた。
「そ、そういうことなら徹さんも連れてきますわ！おふたりのツーショットなど……　それはそれは素晴らしいものになると思いますわ」
ヨダレー
「うん！それいいねーセシリアちゃんも写っちゃう？」
「一度男性操縦者のみの括りで撮影したあとで結構ですわ。
むしろわたくしなどよりもおふたりが重要であって……　それより撮影した写真は、当然全ていただけるんですよね？」
「そりゃもっちろん」
セシリアの要望通りに男性操縦者の撮影を行ったあと、結果として

クラスの集合写真と化した専用機持ちの写真撮影とがあった。
セシリアが凄く満足気な顔をしていたのが印象的な就任パーティーとなった。

◇

「恐ろしい目にあった・・・・ あののほほんとした少女は何者なんだ・・・・」
今の自分の名前にはカグラのカの文字もないのに、一体何がどうなったらカグランなどというあだ名ができあがるのか？
もしかして前世の自分の姿まで完全把握されているのでは・・・・ と思いかねんほどの衝撃だった。

「・・・・・・ ルームメイトが来るのは明日からだったかな？」
一週間限りのルームメイトとはいえ仲良くできれば、と思う徹だった。
「それにしても静かだな・・・・」
ひとりで使う客室はいつも以上に静かだった。
いつもならば部屋にひとりでいようと、隣の１０２５号室の一夏とルームメイトさんの大きな物音で多少の賑やかさはあるものだ。
（こういう静かな夜は・・・・ あの夢を見る。決して忘れられないあの日の夢を・・・・・・）
夜はふけていく。徹の学園生活はまだ始まったばかりだった。

◇

～某所・地球上の何処か～

ラボの中では束が約三日ぶりの食事をとっていた。
ゲル状の物体を美味しそうに食べている。
おそらく常人が口にすれば、生と死を彷徨いかねない事態が起こるであろうものを躊躇なく口に放り込む。
「束様……　よかったのですか？徹様にあのことを伝えなくても…」
「ふぁんのふぉとふぁいクーふぁん？」パクパク
（訳：何のことだいクーちゃん？）
「徹様が訪れたあとやプル・トゥエルブが現れたあとに生じた次元の歪みの跡……　それに似たものが過去にふたつほど発見された事実をです」
「もしかしたら徹様のように世界線を超え、こちらの世界に来た人間がいるのかもしれないという話です……
しかも観測跡から推測するに、先のふたつの反応のうちひとつ起きてから５０年はゆうに経過しています」
「もうひとつの反応も発生してから最低１５年は経過しているでしょう」
「これは共有すべき情報だと思いますが……」
「ゴクン……　そうだねーそうだろうねー」
束は少し考える〝フリ〟をすると、いたずらっ子の顔をしてこう告げた。
「ＩＳ学園でこれから起こるゲームが箒ちゃんといっくんのためゲームなら……　そいつらは束さんととーくんのためゲームのラスボスさんなんだよ」
「そのふたりの人物は私にとってもとーくんにとっても敵なんだから

ね？」
「ゲームを楽しくするには楽しくするための条件ってものがあると思うんだ」

天災の考えは常に常人の理解の外をいく。
その無邪気な表情の裏にある考えは助手のクロエ・クロニクルでさえも想像もつかないものだ。